明治二十六年十二月十日發行

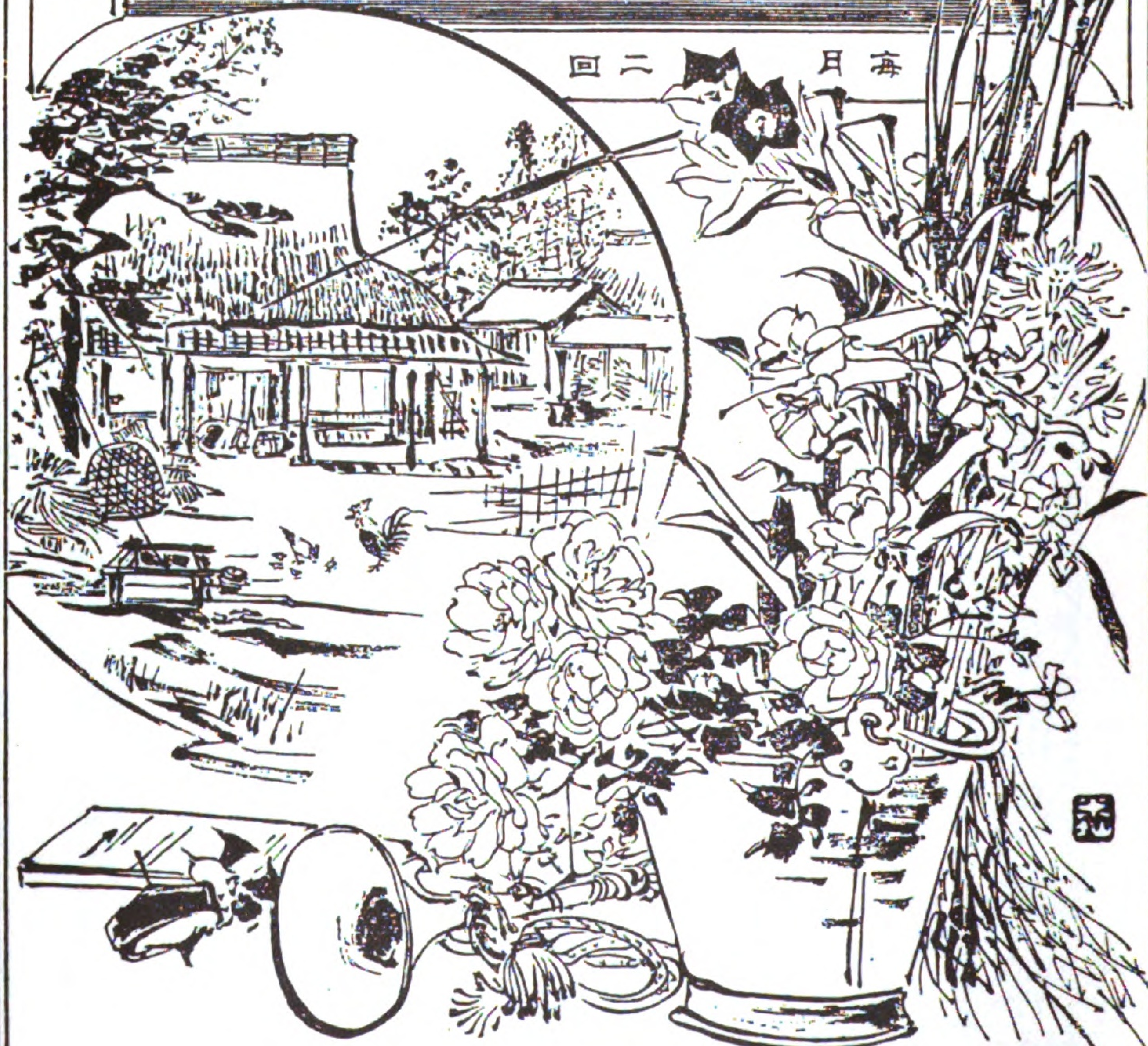
THE HOME MAGAZINE

家庭雜誌

東京家庭雜誌社發兌

定價金五錢

毎月二回



第拾九號

宮崎八百吉著

再版

十二文豪 第四巻 ヲルヅヲルス

肖像入
定價十八錢
郵税四錢

本書一たび出で批評を待ずして再版し批評出て、再版亦盡んとす、盡きざる中に讀め、若し夫れ本書の價値の如き即ち左の批評を讀め、

讀去るの中恍々然として彼のヲルヅヲルスと共に相提携して湖國のほとり山影水聲に起臥して起雲飛鳥を眺め心靜に躰寛に自然造化の幽妙に化せられんとするの感あらしむ、（讀賣新聞）

殊に後章の如き支那に於ける田園詩人と氏とを對照批評せしものにして兩者大に其類を同ふすと雖其依りて來る性情、生活、天職に於て全然眞反對に立てるを論するの一段蓋し湖處子にして始めて是論ありと言ふべし、（毎日新聞）

末段ヲルヅヲルス氏と陶淵明とを較論し其性情、詩趣學植天分を甄別せる所一段の見識精明の觀察流石に佩服の外なし、（都新聞）

湖處子がヲルヅヲルス成りて湖畔詩人が高風絕塵始めて我邦の讀書社會に紹介せらる湖處子のヲルヅヲルスを傳ふるが如きは眞によく其人を得たるものなり、（日本評論）

其外好評盡く擧ぐべからず

山路彌吉著

三版

十二文豪 第三巻 荻生徂徠

肖像入
定價十八錢
郵税四錢

◎自由　豪放濶大なる一奇儒は瀏々流れて盡きざる文字の間に傲然箕踞せるの想あり

◎國會　著者の温かなる同情と鋭き眼光と快利なる文章とは能く徂徠を寫し得て略其面目を活現せり

竹越與三郎著

三版

十二文豪 第二巻 マコウレー

肖像入
定價十八錢
郵税四錢

◎毎日　一度巻を開くや知らず／＼マ氏の性情、思想、經歷、文躰あきらかに現れ來る、其行文一瀉千里順風に帆を上て行くが如し、

◎朝野　批評精細、能く大勢に通ず、文酷はだマコーレーに似たり、

平田久著

再版

十二文豪 第一巻 カーライル

肖像入
定價十八錢
郵税四錢

◎早稻田文學　トーマス、カーライルが一生事業と其の經歷と特質とを趣味ある筆をもて敍說評論し頗る其要を得たり、

◎大坂朝日　カーライル一生を悉くせり近時の著述者讀んで自から愧る所を知れ

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

湖處子宮崎八百吉著
◎第三國民小說　定價拾五錢　郵税四錢

◎歸省　定價拾五錢　郵税四錢

ヴヰクトル、ユーゴー著　森田思軒譯
◎懷舊　定價貳拾錢　郵税四錢

德富健次郎纂譯
◎グラッドストン（肖像入）　定價貳拾錢　郵税四錢

德富健次郎纂譯
◎武雷土（肖像入）　定價拾五錢　郵税四錢

德富健次郎纂譯
◎格武電（肖像入）　定價貳拾錢　郵税四錢

竹越與三郎纂譯
◎格朗宅（クロンウェル）（肖像入）　定價貳拾錢　郵税四錢

平田久著
◎伊太利建國三傑（肖像入）　定價貳拾錢　郵税四錢

櫻痴居士　福地源一郎著
◎再版　幕府衰亡論　定價三拾五錢　郵税六錢

德富猪一郎著
◎九版　新日本之青年　定價貳拾錢　郵税四錢

德富猪一郎編纂、久保田米僊揮毫挿畫
◎四版　誕生日　定價拾五錢　郵税貳錢

人心の明鏡處世の秘寶
◎六版　一語千金　定價五錢　郵税貳錢

○發行所　東京京橋區日吉町　民友社

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價		郵税地方共
一冊	金五錢	金五厘
半年（十二冊）	前金五十錢	金五十六錢
一年（廿四冊）	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰一回ニ付）金八錢
○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

發行兼印刷人　垣田純朗
編輯人　塚越芳太郎
發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

明治二十六年十二月十日發行

家庭雜誌第拾九號

目錄



家庭雜誌第拾九號

（明治二十六年十二月十日發兌）

社　説



健康、衛生　附、看護の心得

健康は一家祝福の基ひなり。家に一人の病者あれば、全家皆な病者たるが如き心地す。病人ある時に家の内の濕り勝ちとなり、不快活なるを見れば、病人なき時に於て、如何に家の内の光明にして、面白きを知らむ。健康は實に難有きものぞかし。

されば一家の主婦たる人などは、別して一通り衛生の道理をも合點し、一家老幼の無病息災ならむ樣、注意に注意を加ふ可き也。諺にも一合の滋養衛生は、一斛の藥劑に優ると云へり、病氣して藥を飮むよりも、病氣せぬ工夫こそ肝要なれ。

却説衛生には、積極と消極とあり、不養生をせず、暴食强飮をなさず、餘りに夜深しをなさず、總ての事に不節制をなさず、何事も規則を守り、眠食、勞作、閑遊共に程能くし。而して滋養物を用ひ、清鮮の空氣を呼吸し、四肢を適宜に働かしむるの類は、是れ積極の衛生法也。」寒暑に堪へ、勞作に堪へ、皮膚を硬くし、筋骨を逞ふし、容易に外邪より襲はれぬ準備をなすは、是れ消極の衛生法也。

衛生に心懸くるものは、双方共に大切なるを忘る可らず。別けて子供抔には、消極衛生の最も大切なるを見る也。

頃ろ水戸烈公の手紙を讀むに、左の如き言あり、

兎角小供歩行いたし候がよろしく朝も未明より起き水にて顏をあらひ薄着にて庭などへ出で小供相應い

たづらいたし候がよろしく候風引候へば其節あたゝまり候が宜しく風を引可申抔とて用心いたさせ候は以の外に候

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

余四歴、初毎朝の水は只今にてもあび候事と存候若しもあび不申候はゝ無理にあびせ可申候さるかはり湯はつかはせ申間敷候事

是れ徳川家の親藩たる水戸烈公が、其の子の教育に就て、江戸より水戸なる留守居に與へたる注意なり。小供を鞠育む親達は、篤と此邊の意味を承知ありたし。世俗の所謂る沸圑見を作るは、餘り用心深き、餘りに手が届き過ぎたる故と知らずや。

併しながら如何なる食物が不消化なる乎、如何なるか滋養分多き乎、此等の手輕き衛生上の智識は、是非共知り居らねばならぬぞかし。小供の好むまに／＼食物を與へ、爲めに腸胃に申し分を拵へ、一生彼等をして病者とならしむるは、實に其の親たるものゝ此邊の道理を辨別せざるが爲めにあらずや。されば衛生上の智識は、誰にもあれ、家を治めん人達は、何卒心得あり度き事なり。

之に加へて看護の心得も亦た大切なり。風邪、頭痛、逆上、腹痛、霍亂等の病氣は、一通り看護の心得あれば、藥用の手當等も、隨分行き届き、遂に醫師を煩はすに及ばぬもの也。又た一寸したる切疵打傷等の如きも、手當の致方一つにて如何様にも平癒するもの也。」且つ愈／＼醫師を煩はすの病氣となれば、看護の心得は、特更ら必要なりと知る可し。藥が三分に看護が七分とは、能くも穿ちたる言葉なり。看護の行き届く時には、藥の力の及ばぬ所迄も、能く療養の功を擧ぐる也。而して看護の行き届かざる時には、藥の力さへも、打ち消す也。善き醫師と善き藥さへあれば、病人は平癒すると思ふは、大なる間違にあらずや。

將た又た衛生看護の智識と仕方とを心得居れば、如何

なる場合に於ても、手後れせぬなり。手後すれば輕き病氣も重くなり、不圖したる打疵さへも、生命を失ふ破傷風となるの類少からず。或は又た病氣の前兆を豫じめ知りて、之を避くる用意をなし、假し避くる能はざる迄も、其の輕重を辨別し、それ〲手當を怠たらぬ時には、大なる失策なかる可し。

されば健康が一家の祝福にして、病氣が一家の咒咀たるを知る人は、宜しく衛生の智識、看護の仕業を心得置くは、洵に大切なるが上にも大切なるものとこそ思ほへかし。

若しそれ妙法様の水の初穗や、不動様の胡麻の灰にて、病氣平癒を祈るが如きは、固より沙汰の限りにして、今更ら事々敷咎むる迄もあらず。



科學

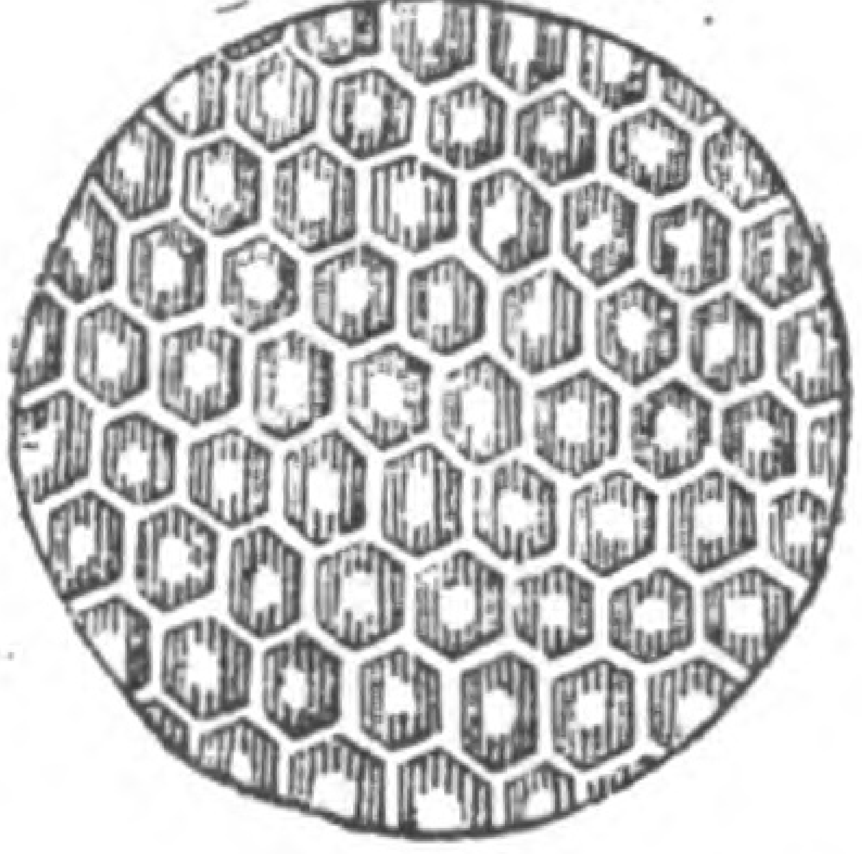
小さき寫眞室

海燕と稱する魚は、眼の形はあれども色も見へず、形も見へず、たゞ眞黒の處と明るき處とを辨す〲に覺とるを得るのみ。世界の動物の中には、なほ幾個ともなく、目のなき動物ある中に、人類は麗華にして奇妙なる寫眞仕掛けの眼を有することそ幸なり。蠅の眼は第一圖の如く、無數の眼の集まりて、數こそ多けれども、人間の如く自由に動かすとを得ず。蜘蛛の眼は澤山にありて、一つの眼にて巣を作る間に、他の眼にて物を見るを得れども、人間の如く美麗に非ず。牛の眼は大にして温和なりと雖も、鷹の眼は勇ましくして活潑なりと雖も、人間に及ぶものはあらず。

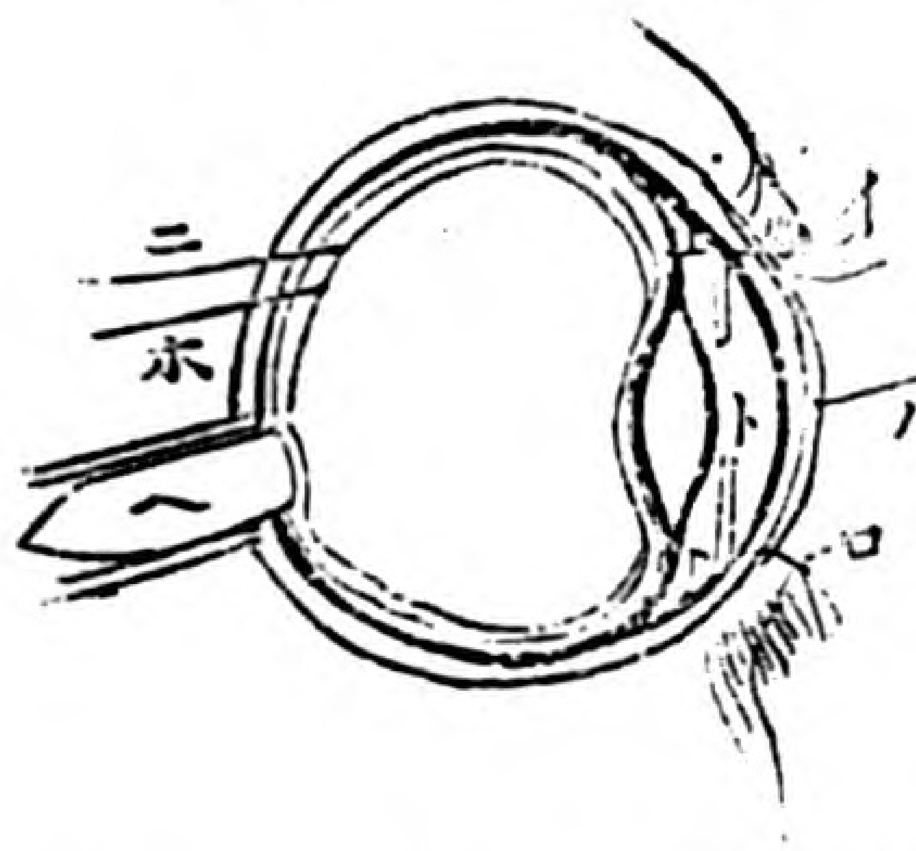
さて人間の眼は如何なる仕掛に出來居るかと云ふに、

卵の黄味の如き圓ろき球の、常に瞼の中に包まれ居るものにして人の顔面には、たゞその幾分のみ顯われた

第一圖



第二圖



り。第二圖は人の眼を竪に半分に切りたる圖にして、（イ）と（ロ）は上下の瞼なり、人間の眼がもし四角に出來たらんには左右を見んとするにも、眼の球廻わらず、上下を見んとするにも、一々顔を動かさゞれば見へずして、甚だ不都合なるを、之が圓く作られたればこそ、くる／＼と廻はるに便利なり。

眼の前に當りて、懐中時計の前ガラスの如く透明の水晶の如き物質あり。今人の眼を窓に例ふれば、瞼は恰も窓かけの働をなせり。この窓掛は晝間眼を開きたる間は無用の如くなれども、寸時も無用の時間とてはなし。人が氣の付かざる間も、瞼のみは常に上り下りつつ涙を以て眼の掃除をなせり。風暴れて砂を飛ばし、人の眼の中に入らんとする時、火の子の飛んで眼に入らんとする時は、注意深き窓番は、非常の速力を以て之を閉ぢ、他物の進入を防ぎ、若し誤つて埃などの入りたる時は、瞼は直ちに涙を以て之を拭ひ去るべし。圖中（ハ）はそのガラスの所なり。その次にありて色の着きたる環の形になりたる所を、眼簾と云ふ。眼簾は通常單に藍色、黒色、鳶色と云ひなせども、その實虹の如く種々の色あり。面白き事はその眼簾或は縮まり、或は開く樣の雛菊に能くも似たるとなり。似たりと雖も其作用は全く反對にして、眼簾は明に對しては縮まり、雛菊は暗夜には小さくなれども、晝間は反て廣がれり。

眼簾の後ろには、眼球あり。魚類を煮る時に、白き球を見るべし。之れ眼の球の固まりたるものなり。眼球の周圍は、硝子を溶かしたる如き、透明の液躰にて包まれたるが、そのドロ〳〵したる品質は、眼の球の抜け出でざる樣に、眼の後の壁に附着せり。又た眼球の前にも、同じく硝子の溶けたる如きものありて、眼簾と眼の球の間に流動せり。人の眼を横より透かして見るときは、透明の處あるは之なり。眼は一言にて云へば、水晶の球が、硝子を溶解したる如く透きとほりたる水の中にうか〳〵と浮びたる有樣あり。眼球の後の壁には、幕の如き仕掛になりて、薄き紙の如きものあり、その後に又た黒き幕あり。（ニ）は白き幕にして、（ホ）は黒き幕なり。その黒き幕の中央に（ヘ）の柄の如きものあり、之れは花の蕚かくわいの莖の如き見へ　あれども、これぞ眼の神經にて、其の神經こそ、最も大切なる働を爲せり。世に明き眼くらと云ふ者あり。表面より見れば美しき婦人、美しき男子にして、何も異りたる處なき樣にして、その眼は我等の如く物を見ると出來ずして、たゞ顔の飾たるに終るものあり。此等の人々は何處が不足したるやと問ふに、眼の神經が腦の命令を聞かざるに由る者なり。今一本の花を我等の前に立つるときは、花は眼の眞中の黒き所、即ち瞳を通りて、奥の壁にかゝりたる幕の上に寫ると、恰も幻燈にて物を寫すに、有のまゝの寫るが如し。その寫りたる物は、大至急の神系の使者を以て、腦に傳るより、今我が前に花のある事を、腦は坐ながら知るを得、その間に後の黒き幕は、今白幕に寫りたる畵を全く吸ひ込みて、消し去るが故に、又た白き幕の上には新らしき物品を、太陽の光線によりて畵かるゝなり。我等が朝寢をなして、太陽の光がもしや戸の隙間よりさす頃迄眠りて居る時、戸の節穴より障子の外の木などの影の入り來ることあるは數ば見る所なるが眼の中も之

と同じ作用により、瞳の節穴より、外物を寫すなり。又た瞳は太陽の光線の強き時は、小さくなり、光線の弱き時は大となる。猫の眼は尤も著しく、開閉を爲すが故に、容易く之を見るを得べし。

人躰の中にて最も小さくして、又最も大なる器關は眼なり。一目見れば英雄豊臣秀吉も目の中に入り、日本一の大山富士も、眼の中に入り、全國の軍艦も、數千の兵士の乘りたるまゝにて目の中に入り、數百町の田畑に、大根も、蕪も、杉も、松も、植りたるまゝにて、目の中に入る。去れどその少なる事に至りては、彼の細き蜘蛛の糸が、空中に翻々たるも見るべく、濱の眞砂も見るを得べく、霧の分子も時に見定むるにあらずや、不思議と云へば不思議なり。

我等が愛する子供の顏を見て喜こび、母の顏を見て喜ぶも、其の實子供も、母も、見るにあらず、我等の目の中に寫りし寫眞を、腦が見つゝあるのみなれば、我等の眼には、子供の顏は白しと見ゆるも、その實物は赤きかも知れず、母は丸き顏なりと思ふも、實物は四角なりや計るべからず。我の眼に寫る處と、人の眼に寫る處とは、又た同じからず。十人は十人、百人は又た百人の異りたる鏡の中の寫眞を見つゝあるなり。されば人の世に在りて肉躰を有する間は、到底眞の物を見る事は出來ず、たゞその寫眞を信じて、見るのみ。もし太陽がおどけを爲すを得ば、その光線の筆を以て、我等の眼に島も鳥と見へ、人も犬と見ゆるも計られざれども、太陽が正直なるこそ、我等の幸福なれ。

実談

佛國革命の花

（ローラン夫人の傳）（一）

佛蘭西の都、巴里の市、ポンヌーフの街、セーヌの河

近く立てる一軒の古家あり。今は昔し此あたり巴里繁華の中心たりし頃、此家に一人の少女住みける。少女逝きて一世紀早く過ぎ、幾千萬の人は生き代り死し代り、世はさま〴〵の變化を閲して、此家猶恙なく、而して此家に住みし少女の記臆も又日を逐ふて愈新ならむとす。そも此家は何の家にして、此少女は何人ぞや。大にしては十八世紀の舊事物を一掃し去つて十九世紀の新天地を開き、小にしては王政の基を覆し去つて佛蘭西に共和の礎を据へ、激動の餘波百年を經て猶未だ收まらざる佛國大革命、其大革命の原動力の其一は實に此家に於て養はれたり。少女名はマリーヲアンフイリポン、他年佛國革命の舞臺に飛舞して千載の名を留めたるローラン夫人は實に此少女の事なりける。今に到て人のポンヌーフを過ぐる者皆其家を指して語る「是れローラン夫人の昔し曾て住みし處」と。抑もローラン夫人は如何なる人ぞ。

夏の半、燕暑き日打續きて物皆蒸殺せられむとする時、眼には見へで天の一角に鬱積し來りし夕立の雲油然として湧き出で、雲興り風來り雨之に次で到れば、ソヨリともせざりし峯の松、森の柏、小笹も草も花も木も一齊に鳴り騒ぎ、天地も終るかと思ふばかり大暴れに暴れて、あとは雲去り風凪ぎ雨止みて乾坤一新せるの感あるが如く、年又年欝積したる革命の氣運は十八世紀の末に到て油然として佛國の天に漲り、滿ち渡り渡れる革命的精神は或は剃髮工に宿り、或は田舍僧に宿り、或は兵士に宿り、或は學生に宿り、纎弱なる婦人に宿り、小官下吏に宿り、無名の群衆に宿り、之を皷し之を舞はして所謂佛國大革命を成就せしめたり。ローラン夫人の如き、亦實に此革命的氣運に動かされて革命の舞臺に立つたるの一人なり。

然れどもローラン夫人は如何にして如何なるさまを以て此大活劇の舞臺には立ちたるぞ。如何にして生ひ立

ち、如何にして此嶮しき時勢に立ち、如何にして世を終りたる歟』。少しく其一生に就て觀察する所あらむ。

＊　＊　＊

思想界の革命已に始まりて政治界の革命は猶巴里人の夢にも入らざりし千七百五十四年三月十八日、巴里のトある市街に靜かに暮らし居たる金銀彫工フイリポンの家に一女兒



生れ出でぬ。是れ即ちマリー、ジアン、フイリポン、通稱によればマノンフイリポン、未來のローラン夫人なりき。初二年は佛國當時の風習に循つて、保姆と共に田舍にあり。二歳の年巴里に歸りて一家居をボンヌーフの街にトし、慧敏なるマリーの耳目は日々身

外無窮の事物を吸收して、智識と身躰と並び長じぬ。フイリポンの家は中等社會に屬し、父は寧ろ氣弱き尋常の男子なりしが、母は夫に立優りて、職分を重んじ心確かに氣丈夫なる婦人なりしと云へり。固よりフイリポン夫妻は正直に金を儲けて正直に世を過ごし吾家を是れ事として高名心は更に吾門外に出でざる平和世界の平和市民たりしに過ぎず。此家よりしてローラン夫人を出せしものは、時勢と云ひ氣運と呼ぶ父母の別にあるありて冥々に之れを生育誘掖したるの致す所のみ。マノン已に長じて尋常中等社會の少女の受く可き敎育を受け、讀み書き歷史地理の初步羅甸の初步唱歌踏舞ヴアイオリン、ギタル等を習へり。然れども此等の規則的敎育は、彼女自から敎育せる所に比すれば、物の數にもあらず。彼女已でに讀書し得る程となりては、ありとあらゆる書籍を得るに任せて讀みぬ。即ち未だ十一歲ならざるに、各聖徒の傳、アッピアスの內亂、土耳其演劇に關する書、種々の旅行者傳記類、紋章に關する論文（彼女は此書を熟讀し父の作の美術の法則に背けるを批評して其父を驚かせり）タッソの詩、テレマク、カンヂッド、プルタアクの英雄傳、など種々雜多の書に眼を通せり。讀書熱は彼女を焼きぬ。新に讀む可き書を得ざれば、幾回も〳〵已に讀みたる書を繰り返へし讀みぬ。彼女の理解力想像力は非常なりき。彼女は書を讀む每に身自ら卷中の人となり、其書中の女傑を以て自から擬し、就中プルタアークの英雄傳を愛讀し、寺院に行く每に祈禱本の襟に見せて竊かにプルタアクを携へ行き、祈禱說敎の間には之を偷み讀みて、二千年前スパルタ、亞典に生れざりしを憾みて泣きぬ。

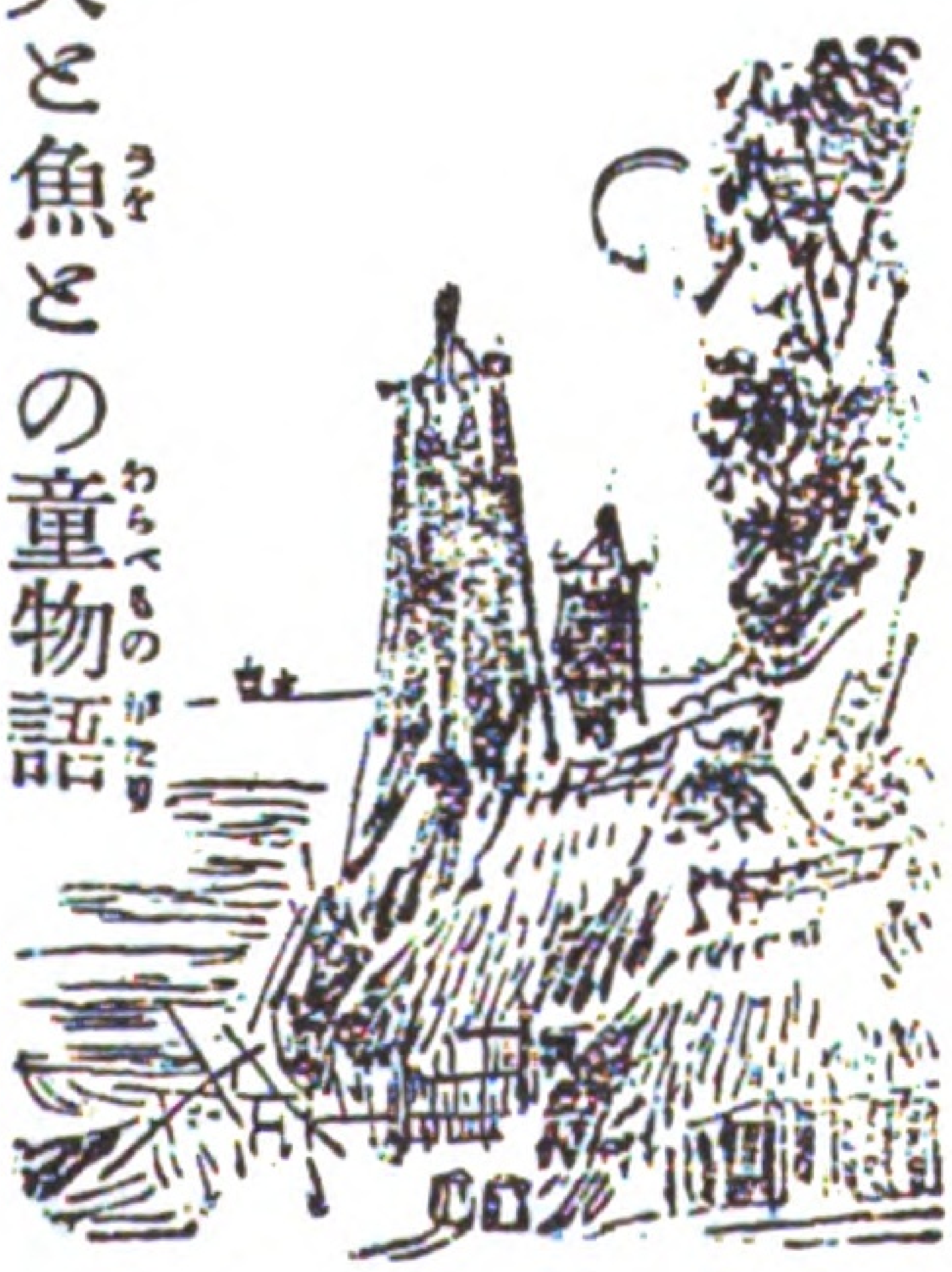
彼女には六人の兄弟姉妹ありたれ共一人も殘らず夭したれば、其初年の生涯は頗る寂寥の生涯にて、彼女はいよ〳〵友を書卷の中に求めたり。其讀書欲、多感に

加へて、思考力も早く發達せり。後年其夫ローランに寄せたる手紙に曰く、天性は余を多感ならしめ、孤獨の敎育は愛情を一點に集めて愈熾に愈深からしめたり、余は幸福悲哀など云ふ言葉を知らぬ前より早くも之を實驗し、他の兒女は大率玩具に忙はしき頃より余は早くも考ふることをなしぬ』と。

彼女の熱心は先づ宗敎に向つて注ぎ、聖禮を受くるの準備として尼庵に入らむことを請へり。當時の尼庵は當今の基督敎女學校の如きものにて、何れの社會の兒女も多く之に寄宿せり。父母即ち之を許し、中等社會の少女の多く入舍する靜かなるヌーヴザン、アチンの尼庵を撰みて其女を入らしめたり。



文藝



漁夫と魚との童物語

プーシキン氏作
嵯峨のや主人譯

いつの頃かは白濱の、
よする海邊の白屋に、
老爺と老婆と住みにけり。
三十餘年の其間、
老爺は毎日海へ往き、

網を打ては魚を採り、
老婆は家に留守居して、
賤の手業の綿つむぎ、
いと貧乏に暮しけり。
ある時老爺海へゆき、
網をばつさり打たるに、
是はまあどうじやい魚でなく、
芥がかゝりてあがりけり。
二度目にばッさり打たるに、
是はまあどうじやい魚でなく、
藻くづ罹りてあがりけり。
三度目ばッさり打たるに、
これやまあ嬉しや有難や、
魚がかゝりてあがりけり。
魚も魚なり金の魚、
たゞの魚ではなかりけり。

其時魚はなげきけり、
人の言葉でなげきけり、
「何卒お願ひ、お老爺様、
私を許して元の海、
ごせうだ歸して。其代り、
御禮は澤山何なりと、
お望み次第あげませう」。
老爺様びッくり仰天せり、
三十餘年の此年月、
すなどり暮す身なれども、
魚が物を言ひたるは、
今まで聞た例なし。
老爺様魚を海の中、
ポンと放してやりながら、
「神はお慈悲だ逃がしてやる、
お禮は何も要らぬから、

廣々とした海の中、
樂しく泳でお遊びよ」。
言ひて老爺樣我家の內、
歸りて老婆に打向ひ、
「これ、まあ、お婆今日予は、
不思議な魚を採たぞよ、
魚も魚なり金の魚、
然も我々人の樣、
はッきり物を言ひにけり。
何卒お願ひ、お爺樣、
私を許して元の海、
と生た歸して。其代り、
お禮は澤山何なりと、
お望み次第あげませう、
はッきり物を言ひにけり。
正可に禮も取られねば、

其まゝ海へ逃したり」。
と語れば老婆いきまきて、
「此馬鹿野郎。大だわけ！
禮さへ貰はぬ意氣地なし！
せめて衣服なと貰ッて來い、
此樣に破れて居るわいな！
お心よしの老爺樣は、
青海原にゆきにけり。
見れば海原白波を、
寄せつ返しつ音高し、
爺樣磯に立あがり、
金の魚をば呼びにけり。
魚は波をばかきわけて、
現はれ出て尋ねけり。
「お爺樣何がほしいのだへ！」
爺は魚にお辭ぎして、

「何卒お願お魚様、
婆が大變わくたれて、
私を困らせぬきまする。
破れた衣服はいやだから、
新しいのを欲しいといふ、
拵へてやッてくんなされ」。
「お歎きなさるなお爺様、
神はお慈悲でございます、
まあ〳〵歸て御覧なさい、
新しいのが出來てます」。
爺様我家へ歸りけり。
見れば老婆は新しい、
衣服着かざり居たりけり。
されどなほ〳〵いきまきて、
「此馬鹿野郎大だわけ!
衣服斗を貰ひ來て!
衣服は高が知れて居る!
も一度魚の方へゆき、
家こしらえてと頼んで來い!」
お心よしのお爺様、
青海原へゆきにけり。
海は波立荒にけり。
爺様磯に立上り、
金の魚をば呼びにけり。
魚は波をばかきわけて、
現はれ出て尋ねけり。
「お老爺様何が欲しいのだへ、!」
老爺様魚におじぎして、
「何卒お願ひお魚様、
老婆前よりわくたれて、
私を困らせぬきまする、
家を作りて貰へといふ、

作ッてヤッておくんなされ」。
「お歎きなさるなお爺樣、
神はお慈悲でございます。
まあ〳〵歸ッて御覽なさい、
立派な家が出來てます」。
爺樣我家へ歸りけり。
見れば白屋影もなく、
我目の前には立派な家、
門の柱の樫樹は、
鉋の跡の光澤てりて、
煉瓦の煙筒ペンキ塗、
窓の硝子は輝けり。
婆樣窓の下に坐し、
世間かまはぬ大聲で、
亭主をあくたれわめくなり。
「此馬鹿野郎、大だわけ!
此樣小さな百姓家、
作ッて貰ッて何にせう!
今一度魚の方へゆき、
百姓女は厭だから、
今度はお金の澤山ある、
奥方樣にしてくれ、
と頼んで來い」。と怒鳴りけり。
お心よしのお老爺樣、
青海原にゆきにけり。
海は波立荒にけり。
爺樣磯に立上り、
金の魚をば呼びにけり。
波かきわけて現はれし、
魚はやさしく尋ねけり、
「お爺樣何が欲しいのだへ!」
爺樣魚におぢぎして、

「何卒お願ひお魚様、
婆が前より惡たれて、
私を困らせぬきまする。
百姓女は厭だから、
今度はお金の澤山ある、
奥方様にと申します。」
「お歎きなさるなお爺様、
神はお慈悲でございます。
まあ〳〵歸ッて御覧なさい。」
老爺は我家へ歸りけり。
其時彼は何をか見し？
雲に聳ゆる高樓の、
玉を磨ける階子に、
ラッコ毛皮の胸かざり、
金糸銀糸の縫のある、
錦の衣服着かざりて、

襟に眞珠の飾垂れ、
指に黄金の指環はめ、
足には玉の沓穿て、
婆様威張て居たりけり。
婆の前には奴婢あまた、
機嫌とり〳〵もてなすを、
老婆は手荒に使ひ居る。
老爺様老婆に打向ひ、
「御機嫌よろしう奥方様、
今度は御意に入りました歟？
如何でござる？」と申しける。
老婆は老爺を睨む様、
ちらりと一目見た計、
廐屋使の馬丁に、
直様追ひやり仕舞たり。
一週間を過にけり。

婆様前より膨れ出し、
老爺を呼び寄せ言ひけるは、
「これやい老爺海へゆき、
奥様もう〱厭になッた、
天下の女帝になりたい、
と今一度魚に頼んで來い！」
老爺様聞て仰天し、
「これまめお婆々何をいふ？
ベレーナをでも喫たのか？
天下が欲しいなんぞとは！
其様無法が何として、
此まお予に言はれやう！」
老婆様 愈大怒、
亭主の頬げたびしやりぽん。
「此土百姓何をいふ！
妾に向ひて物いらがひ。

奥方様なる此予と、
物いらがふとは不屆な！
さッ〱と海へ往て來い！
往かずは牢へ打込むぞ！」
老爺様海へゆきにけり。
海何となく荒摸様、
物凄くこそ見えにけれ。
老爺様磯に立上り、
金の魚をば呼びにけり。
波かき分て現はれし、
魚は爺に打向ひ、
「お老爺様何が欲しいのだへ？」
爺様魚におじぎして、
何卒お願ひお魚様、
婆様また〱悪たれて、
金持奥様厭だから、

天下の女帝にしてくれ、
と私を困らせ抜ますする。」
「お歎きなさるなお爺樣、
神はお慈悲でございます。
まあ〳〵歸て御覽なさい、
お婆は女帝になッてます。」
爺樣我家へ歸りけり。
見れば目の前是は如何じや？
帝の宮殿巍々として、
光輝く結構なり。
錦を飾りし室の內、
玉をのべたる高御坐には、
婆樣坐りて傲然たり。
前には貴族や士族達、
機嫌いろ〳〵取ながら、
瓶より酒をついでやる。

婆々はずッと王樣氣取り、
美味に舌をばならし居る。
其周圍には番兵共、
銳き斧を肩にして、
恐ろしさうに控へ居る。
老爺樣一目、仰天し、
婆々の足にひれ伏して、
「御機嫌よろしう、女帝樣、
今度は御意に適ひしか？
如何樣で」と問ひければ、
婆樣老爺を見もやらず、
何者なるぞ追出せ！
左右に向ひ言付たり。
貴族や士族走寄りて、
老爺の頸首ひッつかみ、
昨日來いと突きやれば、

戸口に走寄る番兵は
斧ふりまはしてきッぱまはる。
閃めく電あゝこはや！
首の飛ばぬぞ仕合せなる。
門の外には人民達、
冷かし貌に嘲笑ひ、
「如何した老爺樣、文盲爺！
女帝に何か願ふの歟？
無學じや、何にも、學問しろ！
斯いふ學問覺えて置け！
他の車にや乘らぬがよい。」
一週間は過にけり。
婆樣前よりふくれ出し、
侍臣を四方に走らせて、
亭主を探しにやりにけり。
探し出して伴來りぬ。

婆樣老爺に打向ひ、
「これやい老耄海へゆき、
女帝ももう〳〵厭になッた！
今度は海の主になり、
青海原の王宮中、
金の魚にも我傍で、
機嫌取らせて住みたいから、
其旨魚に申して來い！」
爺樣前に懲りたれば、
言葉も返さず往にけり、
近づき見れば海の面、
怒れる波は天を打ち、
巖を碎て號叫ぶ、
物凄じき大荒なり。
爺樣磯に立上り、
金の魚をば呼びにけり。

波押分て現はれし、
魚は老爺に打向ひ、
「お爺樣何が欲しいのだへ？」
爺樣魚におじぎして、
何卒お願お魚樣、
またもや慾張婆奴が、
惡たれわめくが如何しませう？
天下の女帝も厭だから、
今度は海の主になる、
青海原の王宮中、
彼奴の傍でお前にも、
機嫌をとれと申します。
老爺樣おづ〳〵言ひければ、
魚はなんにも物言はず、
尾ひれで水をはね揚て、
海の底へと沈みけり。

老爺は磯に立ちしまゝ、
永き間を待ち居たるが、
魚は現はれ來ざりけり。
待くたびれて爺樣は、
老婆の方へ歸りけり。
見れば王宮影もなし。
壞れかゝりた白屋が、
昔のまゝに荒てあり、
床には彼の婆樣が、
昔のまゝのつゞれ着て、
しよんぼりとして居たりけり。

養生は運動にあり

筑峯女史

凡そ人は何事にまれ精神を遣ひしのちは、必ず郊外な

り又は高台なる地などに到りて適度なる、運動を爲すこそげに健康を保つことの第一とは思はれけり。わらはある日の事師の元にて少しばかりの調ものせしに、そのやうやくに終へけるに、折とて日もいとうらゝかなればいでや何所か運動せばやといひけれど、是と思ふ場所もなかりければ、近きわたりなる愛宕をめざし師の君と共に〳〵家を出て、そこはかとなくこゝろのまに〳〵ありきつゝやゝ愛宕にいたり登らんとあふぎ見ればげに、きゝしにたがはぬいと急なる石だんなるに少したゆたひ侍れど、是又一興と一目散に登り初めしが、中ごろより餘ほどこたへぬれど止まるを得ざればかろうじて登りつきぬ。然るに其の呼吸せわしきとともに胸の動氣甚だしき故暫し息をつぎつゝいと心なき我慢を笑ひつゝかゝる拙なき事より思はぬ病ひも出でん事もやなど語りつゝ、廣くもあらぬ園中を散歩しつゝ、遂にかしこの高ぞのに上りけるに、いとせばき場所なれどいとめづらしく眺むるに、前は數萬の人家碁石を亂積せし如きそが中に所ろ〳〵の製造場より立つ煙り空にたな引き霞かとうたがはれ、げに高き所より是を見れば都も空氣のあしきとは初めて知られそめたりき。是につけとかくにぎおふ場所に住ひなす人は時々郊外になり出て新鮮なる空氣にあふこそ第一の養生とはおもひ侍りき。向ひは名も品川の漣波に漁舟の漁どる有樣は秋の木の葉のちりにし湖水かとうたがはれ、何となく景色たち見ゆ。後は所々の小森の中に紅葉もやわらんけしき計りに色めき見ゆるに、げに都の紅葉はかゝるものにやといとおかし。はるかあなたをながむれば



白砂つゝむふじの嶺雲か霞かかゝりしは煙かと見へまがふ。其礎をかこむ足柄の山の景色も中〳〵にて、さきなる胸のおどろ〳〵しさも打忘れ今は心ちさはやかになりしゆゑ、是を無げにすごすもいと口惜しき事なり腰折もがなと思ひしも、素より淺き學びの心故たゝ景色にまどひいひ出んすべも無いとこふじ、はては我身の拙なきをかこちつゝ歸らんほども打忘れ彷徨侍りしに、後の方にて足音高き響に驚きかへり見ば今までありし師の君の姿も見へず侍れば、急ぎ下り共に〳〵澁茶にのんどをうるをしそこを出て背べの下り易き坂より元來し道をたどりつゝ歸りて食事に就きけるに、遂にも無わじよかりしは是第一氣を養ひ適度に運動なせし結果ならんと信じ侍りき。されど適度なる運動を爲す時は、自然と精神の厭氣を去る故に心地すか〳〵しくなりて、たとへ何事なり勉强爲すともよく記臆され、又よき考へも出ぬれば、分きて望みある人々は時〳〵家外に運動を爲し躰を養ふことを肝要とこそ思ひはべれ。

寓意詩

クルイロウフ氏作

笛仙子譯

鈴虫及蟻

踊好の鈴虫が、時候の好夏の間は、好氣になッて面白がり、歌計り歌ッて遊んで居たが、ふり向た間もあらばこそ、冬はもう目の前です、凉やかな野も霜がれてしまひ、天高く晴渡ッた日も何處へやら、木の葉の陰には何時もまあ、おいしい食物(鈴虫の爲めには)美しい家、澤山有ッたが其も皆無！寒の冬には御用心、ひもじくなッてまゐります。鈴虫ももう歌はお廢だ。其筈。空ッ腹をかゝへて誰が又、歌などゝいふ了見を。きらひな氣病で倦じ果て、鈴虫蟻の所へ轉げ込み、「兄

弟頼む、力づくまで貢ついでくれ、永くとは言はぬ、たッた春迄、食はせて、被せてくんなされや。」「おッと兄弟、其は少々偏癡氣吝だの。全躰夏中稼だかの？」と蟻は鈴虫に尋ねました。「どうして兄弟、其所歟、私の方では朝から晩迄、柔かな、奇麗な草の上で、飛んだり、はねたり、歌ッたり、其で大々目がまはッて仕舞ッた。」「おや其では手前は……」「夢中で夏中遊んで居たのさ。」「夏中遊んで？其では今になッて困る筈だ。自業自得だ。家へはおかれぬ、何處へでも往て、勝手に踊るともはねるともしろい！」

狼及び小羊

強い者の前では弱い者はいつでも罪人で、其例多く歴史にあります、我々は歴史は書かないが、然し寓意詩に其事は歌て有ますよ。

ある夏の事で、小羊が小川の邊へ水を呑に往ッたが、飛んだ災難に出ッくはしました、といふは空腹の狼が、恰度其處へかけて來て、小羊を一目、好獲物と近寄りました。然し惡い事も、せめて人前丈は、もッともらしく見せかけやうと無理な理屈を我鳴ります。「これ、何をする、不屆な！其樣穢らしい鼻頭を、予の飲む水の中へ突込んで、砂や、芥で濁す歟？其樣太い事をする、手前の素ッ首を引込抜くぞ！」「あゝまうし狼樣、狼樣閣下、閣下が若私の建言をお許し下さらば、私は申し上升す。私は閣下のお立の所より、百歩も下で呑で居ます、其で何如して濁す事が出來ませう、此儀を御勘弁に相成れば、其御立腹は聞えぬ樣に存ます。」「と左樣ぬけぬけ迂詐をいふの歟！此横着者奴！其樣太い事が、此世の中にまたと有らうかい！これ、覺えて居るぞ、去年も手前は、此處で予に何だかで亂暴をしたぞ。え、如何だ隊長！予はまだ忘はしないぞ！」「是はまた途法もない、御勘弁下さい、私はまだ生れてから一年になりませんのに」と小羊は言ひま

した。「さう歟。其では手前の兄貴で有ッたらう。」「否もうし、私には兄貴は有ませんものを。」「左樣歟、其では朋友歟、親でゝも有ッたらうが、誰で有らうと、兎に角手前達の種族は、種族だ。全躰手前達の種族は不届だぞ！仲間の中が羊で有ッたり、牧羊者であッたりだ。而してどうせ予なぞの事は、誰でもよくは思ッて居まい、出來るなら仇でもしてやらう位だらう、太い奴だ！其罪を予は今手前に向て尋問するのだ。」「ですが何を私は悪い事をしました？」「默れ！予はもう聞飽た。予には手前の悪事を穿議する樣な暇がない、青二才奴！手前を見てから、予は手前を食ひたくなッた、食ひたくさせたのは手前だ、其が全躰手前の罪だ。」と言ふや電、薄暗い林の中へ一さらひ。

豫言者

ある所の祠に木像の神樣がありました。此神樣木像のくせに、卜易の樣な豫言をしたり、荒たかな託宣を遊ばされたりしました。其代り頭の頂邊から足の爪先迄金や銀の御化粧をして、立派な飾で光り輝き、供物の山で埋められ、お經の聲で耳はとんぼ返り、香の匂でむせる息は、つまらぬ計の全盛です。誰も彼も盲滅法、無闇に豫言者を信じたが、はれまあ、是は不思議、是は名折れ、不意に豫言者迂詐を吐く、託宣少しも辻褄合はず、誰が往ても、何を聞ても、答は馬鹿な事斗り。其處で皆が仰天した、あの荒高の御神處は、何處へまあ往てしまッたのだらう！然し別に不思議はない、其理は實に斯いふ次第、木像は元より空ッぽう、中に司祭がかくれて居て、世人に託宣をしたのです。から利口の司祭の居た間は、木像馬鹿をしやべらなかッた、然し馬鹿の司祭が來てからは、其言ふ事は馬鹿斗です。

私は聞ました、昔斯いふ判官が有ッた、と其人は、伶俐の書記の居た間は、大壯伶悧で有ッたといふ事を、是は眞個で有ませう歟？

鳩と梟

殘鷙なる梟飛んで東に向て去り去る、途偶忠實なる鳩に逢へり。

鳩問て曰く、『君去て將に那邊に之かんとするや。』

梟曰ふ、『我は東方に去らんとするなり。國人皆我が聲を惡む、我復た此地に止まらじ。』

『开は非なり、』と鳩は言へり『君が聲を改めずんば何くに之くとして能く惡まれざらんや、若し其聲を改めなば何ぞ必ずしも東方をこれ如かん』。

繪畫

丹青叢譚（承前）

蕉隱生

廿二、或人柳澤淇園を評して、そのなす所人の不意に出るが王子猷に似たり、その客を好むところ鄭莊の風ありといひしも、實にことわりなり。淇園名は里恭字は公美、淇園は其號なり、又玉桂と號す、大和郡山の人にして、文武はいふまでもなく甚だ多藝多能の士なりき、人となり曠達不拘、客を好みて、才となく不才となく、總て寄食せしむるもの幾人なるをしらずといふ、



淇園ある日、書齋にありて、山水の圖を作り居たりしが、いつかはしらず、一人の乞人窓の下に來り、恭しく兩手をつきて眺め居たり、淇園はさることとは少しも

知らず、唯墨を飛ばし、筆を走らせて程なく畫の出來上りたるより、漸く筆を擱き、何げなく窓の方をみて始めて、そこに人のあるを知り、且つ訝りながら眸を凝してみるに、その蓬なす頭は幾日か櫛梳ざりけむ。着たるといふも名のみなる襤褸を身にまとひて、肌もあらはなり、されどその瘦せ衰へたる顏、または雙の眼の中に何となく凡ならぬ所あり、且つおのれの畫をみて心醉せるさま見て即ち乞人に、汝は我が畫をみてまた樂しむところあるにやと問へば、乞人されぱにて候、われらの如き賤しきものゝ口より申さんも恐れ多けれども、まことに身は靑山白水の間に逍遙が如き心地こそ致すなれ、また憚りながら、君の雅懷もおし測られ申すなりといひながら倘頻りに眺に入る、淇園はたと横手を打ちて、さて〳〵そこもとは面白き人かな、われも、またそこもとの胸懷を推測るに、その風流、吾輩に一步も讓らずものと覺えたり、おのれの畫、そこもとの賞翫にあつかる、いはゞそこもとは我を知るものなり。士は己を知るものゝ爲に死し、女は己を愛するものゝ爲に容づくるとかや、それがしも、この畫をそこもとに取らすべしと手づから畫を卷きて、取らせけるに、乞人大に惑ひてたび〳〵辭すれども倘きかざれば厚く禮を陳べ、よろこび勇みてもちかへりける。五六日も經て、彼の乞丐また來る、何事ぞやと淇園出でゝ遇ふに、乞丐のいふ、さきの日は身に餘りたる貴墨を賜はり、喜びこれに越ゆるものあらじ、後ち家にありて、日々展觀するに、畫中の泉聲松籟音あるが如くに思はれ、ます〳〵捨てがたく、それにつけても何かな御禮いたさばやと思ひわづらへども賤しき身にはせんすべもなし。それがし頃者某山に暫時住居を定めて候へは、甚だ身の程もかへりみぬ申條ながら聊か寸志の報せんとするものあれば明日午後、まげて、來給へかし、假令何の設けはなくとも泉石を弄するに

たよりよければ。また道はかく〳〵といひ捨てゝ飄然としてたち去りぬ、淇園怪みながらも、いよ〳〵面白き奴かな我行きてみむとて、其翌、某山に登り、さきに教へし道をたどり〳〵て行く、十五六町ばかりも來たりし頃、古松参差として數百株もある間に一の熊徑あり、いと淸らかにして點塵を止めず、即ちこゝを過りて又半町ばかりに少しく平坦の地あり、唯見る、傍の峭壁に一樹の偃松あり、その松の枝に一條の繩を垂けて、新らしき土瓶に湯を盛りて結びつけ、下には火をいれたり、その傍に、これも新らしき手桶に淸水を貯へて、柄杓をさへ添えたり、席と覺しき所は薦を敷き、其上に茶具をならべたり、いづれも麁物なれども、淸けならぬはなし、淇園いよ〳〵奥に入りて、これ乞丐の兼て設け置きし處ならめとて、その席に坐して、四方の風光を弄して待てども〳〵來らぬに、淇園少しあくみて、手づから茶を立てゝ數椀を喫して後はからず席の一隅に扇面のあるを見出して、手にとり開き見るに一絶句を記るせり、いふ、

逍廻空過二十年。肉重不レ能二飛上一レ天。抖二擻衲頭一還自笑。嚢中也沒二一文錢一

と狂草もて寫せり、その勢龍の如くにしてまた凡手にあらず、淇園不覺驚嘆して自ら失ふものゝ如くなりき。猶乞丐を待てども來らぬに、漸く思ひ絶ちて、暮靄遠近の山を圍みて、林鳥塒にかへるころほひ家に歸り。終身其人を知るによしなかりきといふ。

廿三、谷文晁名は文晁字は文晁寫山樓と號し又畫學齋と號す江戸人、初め畫を加藤文麗に學ひまた馬孟熙(北山氏江戸人)に學ふ、後ち牧溪、雪舟、探幽の筆意をしたひ、又明人の筆を折中して一家の風をなせり、尤も山水を好くす、其雲烟浮動嵐光呑吐のさまは殆んと明人の席に坐せんとす、性磊落不羈禮節に拘らす。ある時盤城白河に住める常盤彦右衛門といへるものは文晁と

交りあつかりしかば、文晁富士越の龍を大幅に書きて贈りたり、その筆力雄勁にして墨痕淋漓、また、えやすからさるの傑作なりしかは彦右、大に喜び、深く愛しいたり、其子彦之助之れを羨ましきことに思ひて、文晁に同し圖を書かれんことを請ふ、文晁うへない即ち筆を染めて、一圖を書ぬ、しかるに、これひはさきの壮快なるものにひきかへて、温雅なる富士の圖にてありしかは彦之助甚だよろこびす、更に前の圖の如くなりし潑墨淋漓たるものを書きたまはれといふに、文晁大に怒りて、さても〳〵汝はわからぬ奴かな、汝の父はこれ業を創めし人なれば龍の富士を、飛ひ越ゆるごとき氣勢なくてはかなはさるべし、また汝は守成の人なれば温和なる富士のごとき、心せんことを思て、さてはかく書き與へたるなり、さるをこの心をも悟り得すして書き改めよとは何事ぞと、罵り叱りて、ありあふ筆おつとりて「愼獨」の二字を書幅に書き添へて、與へたりといふ、



また或時將に尾張侯より命せられたる金屛風を書かむとするに際して客あり、文晁に面會せんことを求む、即ち書室に延きて、さて金屛を書かくよしをいひて暫くこれにて待たれよとて、直ちに筆をよりて墨汁の中に醮し、金屛に臨みて、一揮するに、墨迸りて、そここゝと滴り落ちて屛を汚すを、客見て、頻にきつかふをも顧りみす、縱横自在に腕を揮ひて瞬くうちに數竿の墨竹を畫き終りたり、所謂胸中有二成竹一とはかくの如きものならんかし、實に見るものをして座におちつき居る能はず、殆んど躍り出さしむるか如くなり

き、さてその汚れたる處は如何にするぞと見てあれは、彼の滴り落ちし墨痕をは雀の頭として幾羽の雀を立ところに畫きたれば一の汚れたる所を存せすなりぬ、大家の胸中はまた別にして優々迫らざるものかなと、客は感しあへりしといふ、

無聲詩話

（九）

此くの如く室町氏の世は一方に軟種の古日本畫を再盛せしめたると共に、他方には宋元畫を輸入し、禪味を加へ、新に硬性繪畫の勃興を導けり。之を近世畫の始めて生面を開きたる時とし、日本繪畫界の一革命とす。

而して其前驅者たり又將校たりしものは實に僧徒にして、皆禪味を帶び、大に其氣品を高めり。

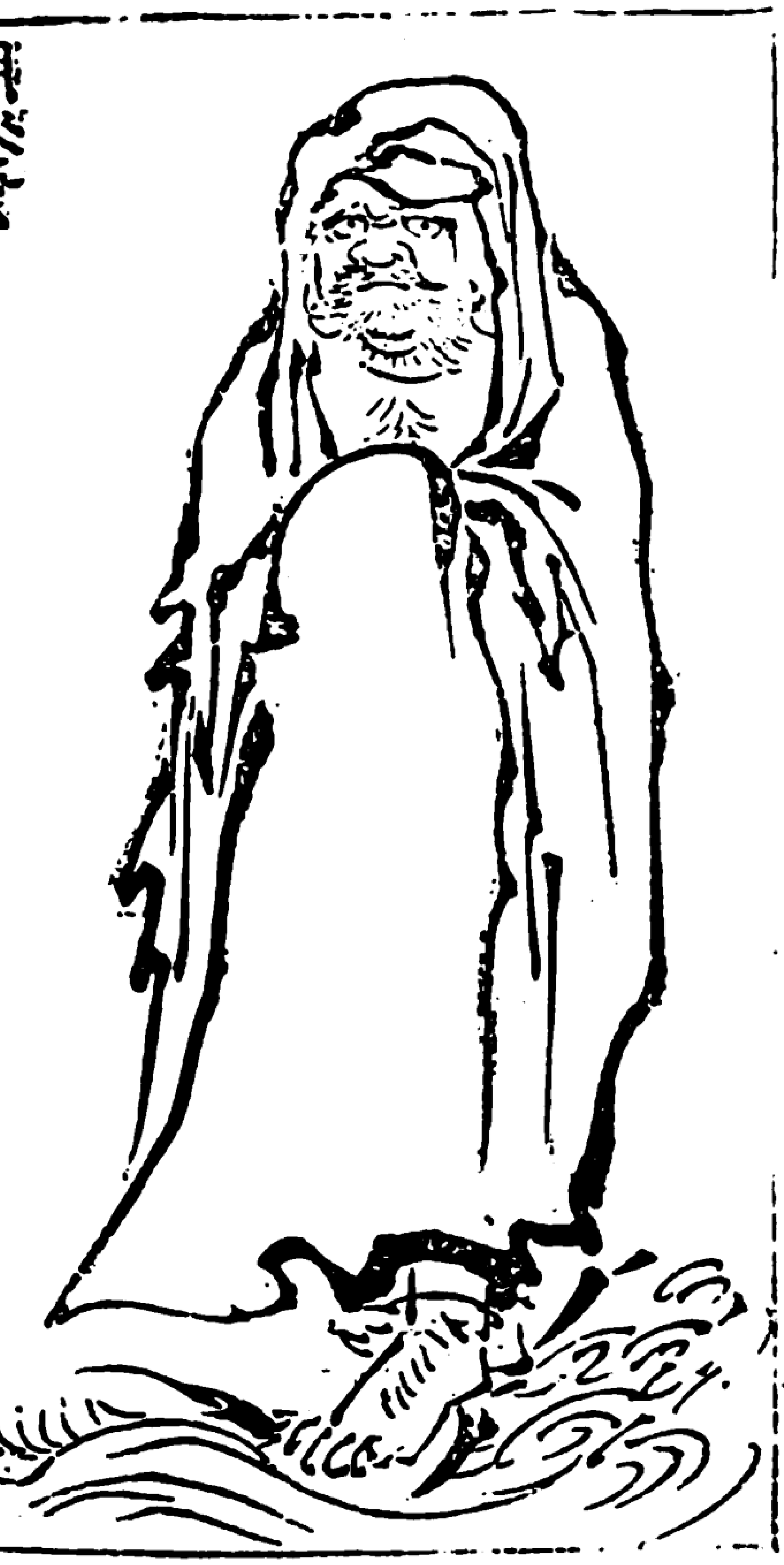
南北の頃に僧可翁あり、鎌倉建長寺の書記祥啓人稱して啓書記といふあり、彼等は所謂漢畫の前驅者にして、牧溪顏輝の畫風を法とし、佛像人物を畫き、減筆水墨畫を作りき。

啓書記、雪溪と號し、又貧樂齋、休日齋、榮普齋、龍杏等と稱す。貞和の初年に沒せり。



それより相國寺の如拙の如き周文の如き、能く宋元畫を學んで氣韻あり筆力あるもの出でぬ。殊に東福寺殿司明兆は佛像を以て本邦第一と稱せらる。

明兆、號は吉山、世呼で兆典司といふ。淡路の人にして義持將軍の時に當れり。其東福寺の涅槃像の如きは、天下の共に驚嘆する所とす。彼は清淡自ら居り、曾て將軍義持に語て「一衣一鉢吾事足る」と云ひき。



明兆筆

年八十にして永享三年寂す。外に周文の流を汲める小栗宗丹能阿彌藝阿彌相阿彌あり。三阿彌は能の子藝、藝の子相、義持義政の茶坊主とす。

之に次で有名なる僧雪舟出でぬ。

家政

正月クリスマスの遊び

環遊び

太郎さん、次郎さん、おみすさん、おますさん、五郎さん、おきくさん、今夜はクリスマスですから皆々面白く遊びましようと、十數名の小供を招きたる時には、菓子を多く與ふるは小供のためによろしからず、さればとて高尚なる遊びは小供には解からずして困るとあり。その時は勝手より手すきを二三本集め來り、長く繋ぎて環となし、小供の中より一人を撰びて中に入らしめ、外の小供等は皆々環になりて立ち、兩手を以て環なりの手すきを持たしむべし。さて一ッ、二ッ、三ッの號令を合づに、中に立たる小供は、

鬼となり環なりになりたる人の手をたゝくことを初むるに、小供等は鬼の目的として來りし手を速かにたすきより放ちてたゝかれぬ樣に務むべし。たとひ一人が手を放ちたりとて、十餘人の人が更る〲紐を取りをれば、紐はくちや〲〲とゆれながら、空にあるべし。その間にもし誤まりて手を打たれし人あらば、その人交りて鬼となるべし。

己れに見へぬランプ

少しく長したる小供のためには、種々なる遊のある中に、なぞ〲も又面白き遊びなり。たとへば同じ室に居る人々は、誰れも見ることを得る所にして、自分計りは如何に仰るも屈むも、顧みても、見へぬ所にランプを置くべしと云ふが如き問題を試むべし、己れのみ見へぬ所とは己れの頭の上なり。又た頭にても、足にても、背にても、何處にてもよけれども、己れの右の手を置くに、己れの左りの手の屆かざる所ろは何れと云ふに、左りの腕のひぢの曲り角なり。

ゴン遊び

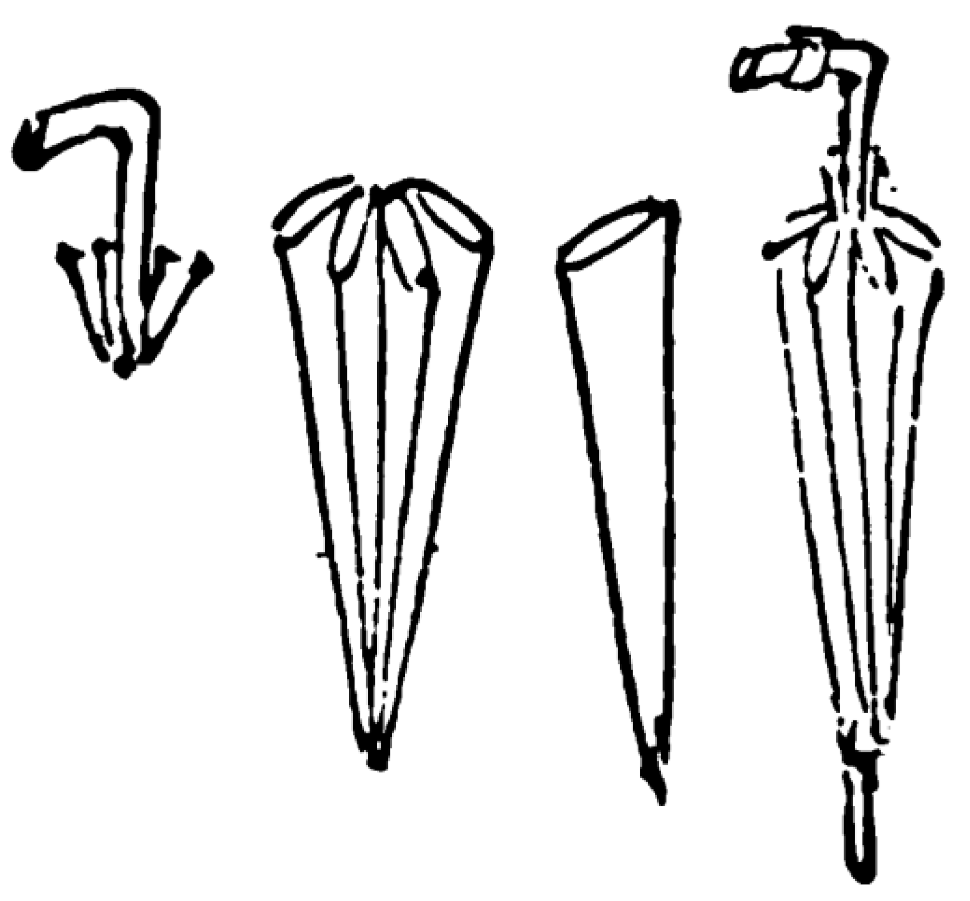
ゴン遊びは小供の最も好みて遊ぶ遊戯の一にして、十二三才の小供より十七八才迄の小供には、最も適した面白き遊びなり。これは先きの環遊の如く、小供等各々手をつなきて環となりて、立てる中央に、二人の撰ばれたる小供、何れも目を掩ひて立つなり。さて一人の合圖を得て、中央に立てる一人はゴンと呼びつゝ他の一人を捕へんとし、一人はハイと答へつゝ環の中を出たり入りたりして逃くゴンハイ〲〲と云ひつゝ環る中、何れも目くらなるが故に、或は突き當り、或は後に居るを知らずして、慌てゝ逃ぐる事あり。或はハイと聲して遙か彼處に逃げたるを知らずして、聲をたよりに探がす樣のをかしさ、遊に見る人をして抱腹堪へざらしむ。これ等の遊びは、誠に無邪氣にして、且つ面白く、運動にもなりて小供のためには、最も善

巧なる遊戯なり。

正月クリスマスの贈物

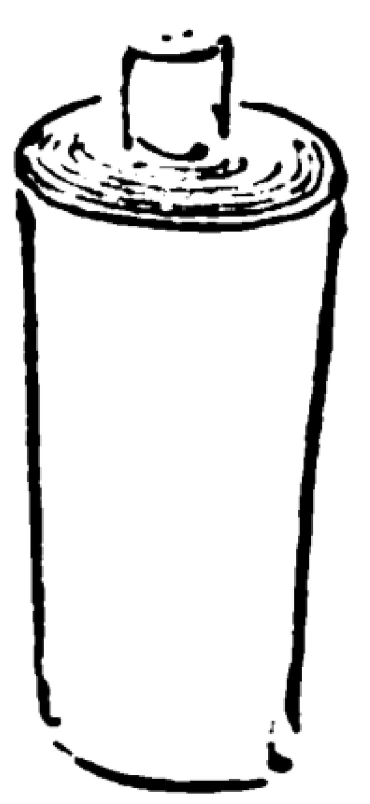
女學生の樂しみて指をり數へたるクリスマスは、もはや瞬く暇となり、子供が待ちたりし正月も、早や一月の中となれり。去年は彼の家に食物を贈りたり、今年は何にせんか、これ何れの家にも心配して考へつゝある問題なり。勸工場に行きて金嚢と相談するも、巧からん。されど精神の贈りものは、家に居りても出來得るなり。西洋人の眞似を爲すにはあらざれども、西洋にては、或は窓かけ、卓子かけ、針さし、糸入、坐布團等、多くは手にて出來得るものを贈るが多し。今新奇なる贈りものゝ一二を擧げんに、第一は蝙蝠傘形の壁袋なり。

これは圖中(イ)の如き細長き三角形の袋を、三四個も縫ひをき、之を(ロ)の如く一所に集めて縫ひ、更らに(ハ)の如きものを厚紙にて作り、その上より切れをはりたるものを、(ロ)の口の處に縫ひつけ、之を釘にて壁に張り付くる時は、一見して蝙蝠傘の如く、状さし、はんかちさし、ふろしきさし等に用ゆるには妙なり。



これは家持への贈りものなり。

第二は半紙の蠟燭なり。正月クリスマス等には成るべく人を笑わせ、樂しまするをよしとせば、同じ一帖の半紙を贈るにも、そのまゝにては面白からず、されば圖の如く木筆を以て、心を作り、之に半紙を巻きて、蠟燭となさば、學校生徒等へのおくりものは面白く有益ならん。



第三は子供の草履にて帆かけ舟を作るなり。麻裏の赤



きはなをの後を行き違ひにさし合せて、船躰となし、小さき繪草紙本か繪紙を以て帆となし、石筆か木筆を以て帆檣となさば、子供へのおくりものには妙ならん。

手製の掛襟

過る日一人の友人に出遇ひしに、美麗なる襦袢の襟を出だし、これは手製にてなしたりと云へり。その美くしくして天然の色の染め出で風流云はんかたなし。いかにも手製とは思はれず、殆どその言の僞ならんかを疑はしむ、かゝる美しきものを、如何にして作りしかと云ふに、これは白き絹、又は白き縮緬の襟地を、平坦なる板の上に置き、楓の葉を一二枚襟地のかたのある位の所へおき、その上より紙か切かをのせ、之を槌にて輕く打つ時は、楓の形はあり〳〵と切に寫りて、天然の染め出しをなすなりと云ふ。切れは縮緬を最も良しとし、楓は餘り紅くならざるものを用ふべし、これは時節がら、娘子への贈りものには最も妙ならん。

否

否と云ふ言葉は、時に由りて非常の勇氣を有するにあらざれば發し能はざるとあれども、否と云ふ一言を、適當に用ふるとを、小供の時より敎へ込む時は、一生の中には幾度の困難を免かるゝを得るか計られざるべし。小供を健康に育つるとは、元より母の務にして、

怠たるべからざる事なれども、小供の健全なる道徳を進め、己れの爲すべき事は己れに不利益なる事をもなすと共に、たとひ何程の利益ありとも、己れの爲すべからざる事は、否と明白に謝絶し得る事を敎ふべし。」一生の中に、受くべき命を有する所の富も、尊敬も、品格も、否の一言を適當に、叉た明白に用ふる能力を有せざる事によりて、之を失なふ事あり。否と云ふ言葉は、格別人情、々實などの解かるに隨がひ、明白に叉た斷然と、云ひ難くなるものにて、人情の解からざる小供の時分、殊に習慣の付き易き小供の時分より、之れを敎へ込む時は、その一生を明白に暮らし終るを得べし。

小學校友等と集まりて遊ぶ頃、隣家に美事なる林檎の木に、少しく色つきたる林檎の、幾個ともなくなりたるを、友人等が相談して取んとするが如き場合には、たゞその母が、僅かの金錢にて、町より林檎幾個を求め來りて與ふるも、叉こわき顔して、叱るも、友人の惡誘に對して明白なる否との返事をなすも容易なれども、已に一人にて生活をなす位の成年となりて、月給を得たる當日惡しき遊び塲に、朋友に誘なはるゝが如き事あらば、一方に懐温くして遊ぶに適當なる時に際して、交際上の義理よりして、否の一言は容易に發し得べくもあらず。かく成長して、始めて否の一言を敎へ始むるは、中々難き業たるなり。否と云ふ事は、一寸人前に義理わるき様なる時もあり、一時己れに不利益なる如き時もあり、友人より惡くまるゝ時もありて、つらき事は度々ならんも、之を斷行したる後の愉快と、叉之れを斷行せざるべからざるの義務とを、小供心に敎へ込む事は、小供に甘き物美しき服を衣せて愛する姑息に比して、如何計り勝りたる愛なるぞ、之れは叉た、金も入らず、筋力も入らずして、何れの住家にても敎ふるを得る事なれば、世の父母たるもの

は、その寶を失なはざる樣に、常に心がくべきなり。

雑事片々

人の炬燵を抱きても尙ほ寒むさに堪へざる寒中に、衣は膝を顯はして躰を温たむるに足らず、食は粗末にして躰を肥やすあたはざる貧兒は日々美衣美食に飽きたる良家の子女に比して、躰の弱はき筈なれもど、その結果は反て反對のもの少なからず。良家の子女が胃病のために病院に通ひ、肺病のために海邊に避くる其間に貧兒は未だ一瓶の藥の味も知らず。病院の門を足踏せしとなしと云ふ。こは運動が如何に貧兒は每日戸外に運動を爲せども、良家の子女は日々家にありて運動せざるが故なりと何人も知る所なれども、敎育の上にも亦た同じことあり。朝より孔孟の講議に聞き飽く程德敎を受けたりとも、之を實行して運動せざれば、所

謂學者の不品行となる。子供が學校にて習ふ所の修身話家の中にて話す所の話がその子女に及ぼす結果は、恰も食物の身躰に於けるが如く、大切なるには相違なけれども、その父母たるものゝ、注意して之を實行せしむると否とによりて、德行に健全ともなる、又病人ともなる。家に二本の薔薇を植へ、日々等しく肥を與へにし、一本は盛々と生長し一本は枯れたり。何故ならんと調べしに、一本は日當りよき地にあり、一本は日蔭なりしに因れり。如何に學校にて德話を聞くとも、家庭が日蔭にして、太陽の光線なき時は、その種子は生長せざるべし。

＊　＊　＊　＊　＊

子供に話を爲すに當り、最も注意すべきは、小供はごまかしを好まず、又た精細なる事を好むが故に、常に話す所の話を話す時に、前に話したる處より異ひたる所なるか、又た常に行ける處へ、二度行く時に前の道

と異なりたるを好まず。これは大人が常に好む處の歌を歌ふ時、その中の一節を間違ゆるが如きことあらば不愉快を覺ゆるに等しければ、深く注意すべきことなり。

火災の豫防

香夢

火災の恐るべきは更に我輩が言を待たず、然れども世人或は偶然この災禍を蒙るとなし、平常諸事の懶惰不注意より、これを惹起すことを思はざる者あり、火災偶然起る者ならんや、平常懶怠なく火の元の注意をよくせば、決して自家より此炎禍を起すことなし、火の元の注意必す怠るなかれ、然れども延燒の災は是非もなきことにて、是こそ眞の災禍と謂ふべし、今左に掲ぐる所の數事は總て自家より此災禍を起さず、及び萬一の事の爲の注意に供するものなり。

燈火の未だ消滅ざるを卓上に殘し置き、其儘寢所に退く可らず、若し終夜火を燈し置んと欲すれば、行燈洋燈を寢所及窓帷障子等より遥かに遠ざけ、四邊に何もなき處に燈心を減じて置べし。

瓦斯の火光を消滅さんとせば、必す其火口を塞ぎ瓦斯を遮斷して然後に消滅すべし、必ず口を以て吹き滅す勿れ、若又如何に火口を塞ぎ遮斷するとも、瓦斯遁散して室中臭氣甚だしき時は、速かに家の戸口にある瓦斯管の龍口を塞き、室内の窓戸を開きて清冷なる空氣を流通さしむべし、過ちて瓦斯の遁散たるを知らず、其室内に火燭を携へ來れば、其火忽ち瓦斯に移りて大變を生ずべし、殊に注意すべきことなり。

人若其衣服に火の移りたるを見當る時は、如何なる塲合に於ても必ず騷動すべからず、靜に心を沈めて手近にある毛氈か或は蓆の類を取て密に身體を纒べし、

又近傍に助くる人なく此等の品なき時は、床上に横臥して衣服を緊しく身に纏付け、輾轉りて火を消すことを勉む可し、又傍に人ある時は其人の上着を脫し我身躰に捲しむべし、此の如くする時は其火速かに消滅て大害に至らず、且つ大火傷をすることなし、假ひ火傷をするとも只僅に手か足かを焦爛すに過ず、之が爲に性命を失ふに至らず、總て斯る災に遭ふときは手足の焦爛位を顧ることなく、性命を全ふして難を逭るゝことを思ふべし。

火災既に起りて黑烟家内に充滿したる時は、必ず直立步行べからず、忽ち烟に哽て燻死すべし、故に伏して逃出づべし、是斯る時は烟氣上に揚り淸氣下に沈みて流通するが故に、三四寸の間は烟下地につかず、故にかくせば無難に免るゝを得るなり、又夜中火災の報を聞く時は必らず惶驚くなかれ、先づ心を沈めて靜かに家內の處置を慮るべし、畢竟火災の防禦は平生に事なき時の準備如何によるのみ、其時に臨みて俄に惶驚くは、所謂盜賊を捕て繩を綯ふ類に同じ、注意すべきは只平生の用心にあるのみ。

翫具

やぎ生

小兒の翫具として賣捌く品は、多くは裝飾を專一とし、價も廉ならす、その上之を小兒に與ふるも、喜ひは一時にして數日を經なは措て顧みず、殊に鐵葉細工は身躰を傷り、粗惡の染料を用ゐたる品は舐め散らす爲に胃を害し、益することゝては毫もなし。然るに世の中には無暗に高價の品を貴びて、買ひ與へ又は贈物とする人あり甚しきに至りては、兒の喜ぶと否とは措て論せす、たゞ其親の歡心を求むる爲め心にもなき贈物、例へば這ふ事さへならざる當歳の兒に、精巧なる滊車の翫具など贈る者あり、心得違の極と申すべし。されば

己れの見に買ひ與ふるにもせよ又は贈物とするにもせよ、妄りに高價を貴はずして此品なれば彼の翫具として適當なりや、危險ならざるや、有益なりや等をよく〳〵思慮して而して與ふべきなり。

然らば如何なる翫具が適當にして危險ならず且有益なりやと云ふに、翫具の種類は夥しく又與ふべき兒の男女、年齡に應じて一々考量を爲さゞれば、豫め此品は好し此品は惡しゝと指定することは爲し難けれども、翫具は强ち精巧にして高價なる品を要せず、却て淡泊にして小兒に適するものあり、余が幼時の翫具福祿壽の如きは、白人の老人の手に就りし粗末なる品なれ共、余は最上の珍玩としてこれを弄したりき、此福祿壽が如何なる品なりやを讀者に語らむ。

余が祖父詔審君嘗て田安齊莊卿に仕ふ、ある時殿舍の造營あり齊莊卿居間の柱材一尺を剩す、祖父これを得て公の暇に福祿壽を刻みたまひ父に與へらる、父其時二歳なりき、これを弄して珍重措かず、成長の後弟に讓り弟又妹に讓る。維新の際舉家靜岡に遷るや此翫具は携へられたり、余生れて亦これを與へられ、大將とし、馬とし、君主とし常に翫具中の主人公として使用さる、ある時は親しき友と此翫具を爭ひしことさへありき、余が弟妹も亦これを無上の翫具とせり。木材は檜にして福祿壽寶珠の玉を捧げし躰、裏面に文字刻しあり曰く、田安御坐の間柱を以て天保九年米洲之を刻す（祖父繪畫を好くす米洲は其號なり）。白人のつたなき腕にて刻みたる品にして、何故に斯く小兒等に珍重されしか、幵は全く使用し易きと、裝飾なきため倦さりしに依る。

余の翫具今や支離滅裂し獨り福祿壽のみ形躰を存す、數年前これを床の置物と爲せり。徒然の夜一家團欒火鉢を擁して此置物に對し幼時を語る時は、當時の幻影目前に到り快云ふべからず。

料理法

霜ふり鯛

刺身に種々ある、中に霜ふり鯛は殊に味美なり、もし鯛のなき時候には、ひらめ、すゞき等、何にてもよし、鯛ならば三枚にをとし、先づ皮を去り能く洗いて、さしみに作り、更らに卵子を湯でゝ黄味計りを摺鉢にてすり(白味計りにてもよし)之れをすいのふの中に入れ上より指にて摺る時は、こまかくなりて網の目より落つべし、その落つる處を先きの刺身の上にかけるなり、さて之に用ふる酢は前以て酢五合に醤油二合位の割合にて煮つめをきて用ふべし、

戸川つくり

戸川づくりに至りては更らにめづらしくて、美事なり、これは鯉を最もよしとす、さて鯉ならば鱗を去り、三枚におろし、皮を取りたるものを、更に幾枚にても出來得る丈け薄すくへぎ、鯉の子をざつと湯出て、能く水氣を去り、且つ冷まし、之れをへぎたる鯉の裏表へ満面に散して付け、巻せんべいの如くくる／＼とまきて、小口よりうすく切る時は、うづまきの様になりて美くしきこと限りなしあしらひには、ゆずか、九年ぼかを用い、わさびを相手として皿に盛りて出すべし、

薄焼とうふ

平皿に用ひてめづらしきは、薄焼とうふなり、これはとうふをよくしぼりて、よくすりつぶし、之れに雞卵を投し、更らにうどん粉を入れ、又た鹽砂糖を少しつゝ加へ、皆々能く混和して蒸し端より薄く切り、焼き鍋にて一寸焼を付くべし、

いり鴨

鴨を骨付きにて一寸計りの丈さに四角に切り、牛か胡麻の油にていり之れと、長いも、栗、椎たけ、木くらげ等を混ぜて鍋に入れ、水と醤油にてざつと煮、汁け

なき様にして茶碗に入れ、別に葛を解かし煮たるものをかけ、せうが、長いもを生にて入れ用ふべし、

鱸のしきし

鱸を四角に切り、二重鍋にして煮るか、ストーブ或はせいろうに入れて蒸し、温たまりたる處へ、卵の黄味を掛けて、更らに蒸し、蕪、松露をそへ、しきみそになして、杉箱に入れ引てに用ふべし、

わわむし

精進料理の刺身には、花芋に、鹽煮の蓮に、わわむし、岩たけをからし、酢味噌にして出すべし、栗蒸たけとは、岩たけをよく洗ひ、堅魚節のだしにて味を付け、之に栗を混せ、竹の皮に上せて蒸すべし、

婦女職業案内

「ゴム」製造品

近頃世間にて「ゴム」の製造品を用ゆる事一般の流行となりぬ、「ゴム」の製造品は花簪等の草物髮具を第一として櫛、笄より中挿に至るまで一見鼈甲又は象牙等に紛はしき摸擬品を製作し、價格も甚だ廉なる所より人々爭ひて「ゴム」品に贔負つきて煙草入の烟管筒まで製造するに至れるが、當時重なる製作品は簪の赤玉又は根掛玉、花簪の辨等を第一とす、而して府下にて最も重なる製造場は日本橋區大傳馬町大西白牡丹なり、其他の小製造所之あるも製作高夥額ならず、大西白牡丹は恰も專業の如く熱心にゴム製造に從事す。

然れども製造と申しても原料を製造するにはあらず、「ゴム」製造品の原料は內地より其用向の原料（譬へば根掛玉用ゐなれば徑何分の圓き長棒を注文す）を外國に注文すれば凡て彼地より原料を輸入し來る、原料品到着すれば即ち其製造にかゝる譬へば根掛玉又は簪

の玉を製造せんとならば長棒になれる原料品を丁度有平糖の如く端よりプツリ〳〵と截りて其片々を機械にかけ角を落して正圓形又は楕圓形と爲し其中心に孔を穿つ、然れども右迄の製造業は重に男子の力を假らざれば善き製作を得ること難し、これより以上の手工即ち完全なる製作品に至るには是非とも女工の力を假らざるべからず、婦人は實に精細なる製造術を有するは凡ての人の天性なれば「ゴム」製造に於ても荒増出來上りし根掛の玉を磨き花簪の葩を精ぶる職業は同じく婦人の天性にて六七歳の小女より老媼に至るまで容易に爲し得べき業なれども男子は之を學ぶべからず、然れども賃銀は婦女丈に低し則ち、一日十時乃至十二時間勞働して五六錢より十錢內外の賃銀を得るに過ぎざれども彼等は一口獨立の生活を爲しつゝあるなり。「ゴム」の需用は今日よりも盛なるに至るべし、「ゴム」の製造の內職に從事するものは益々奮つて其職を勵せざるが好し、時間は熟練を生ずべきものなれば必ず其心懸すべし、無職にして徒に時間を空費し居るものは速に府下各製造場につき業を求めよ。

因に曰ふ、目下にては原料品を外國に仰ぐば、內地にては未だ外國程の需用なく、製造場を設くる時には十萬以上の資金を要す、今や內地に於て如何に流行品となりたるも資本の金利を見るに足らず、故に外國に輸入を委賴すれども行々は內地にて原料製造場を設くるに至るべし。

手藝案內

襠高袴の製作

本年も早や新年に近きぬれば日本的禮服家は袴の準備も可なるべし、但し持參の人には言はず。

さて袴には小倉の仕立より嘉平次、仙臺平、練仙臺、琥

珀等の布帛地を以て調製す、然れども袴の調製は萬の仕立物中最も困難なるものなれば往々裁ち損ずることあり、故に上等物は成るべく本職の仕立屋に一任する

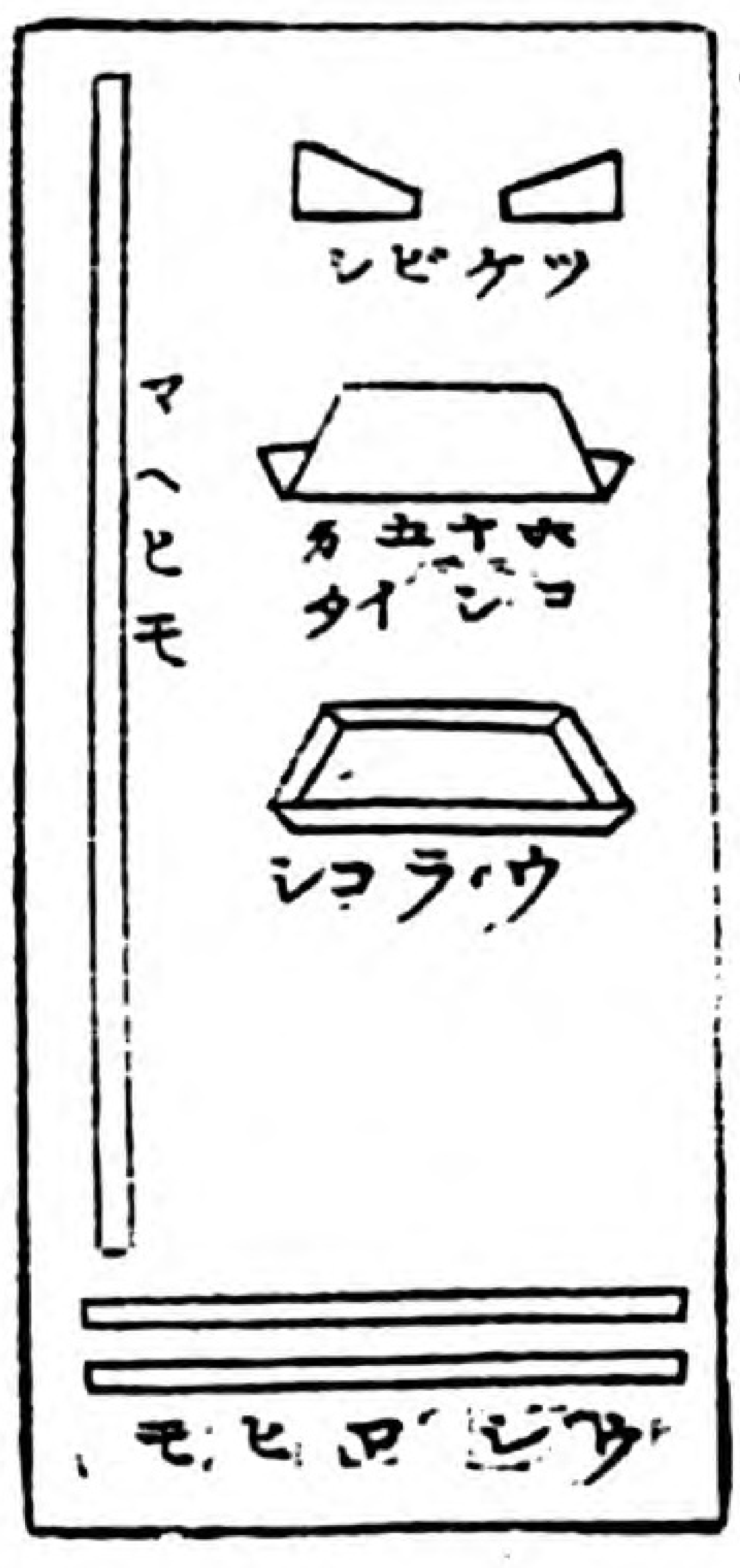


襠高袴前紐裁

が宜し併し、追々年末に迫り新春まで僅に二十の日子を剰すのみなれば何處の仕立屋も種々の注文込み合なかゝく委頼を諾する事能はざるべし、裁縫に器用なる家妻及家娘は宜しく手製の禮服を製し令郎又は令兒新春の晴衣とするも亦可ならずや。

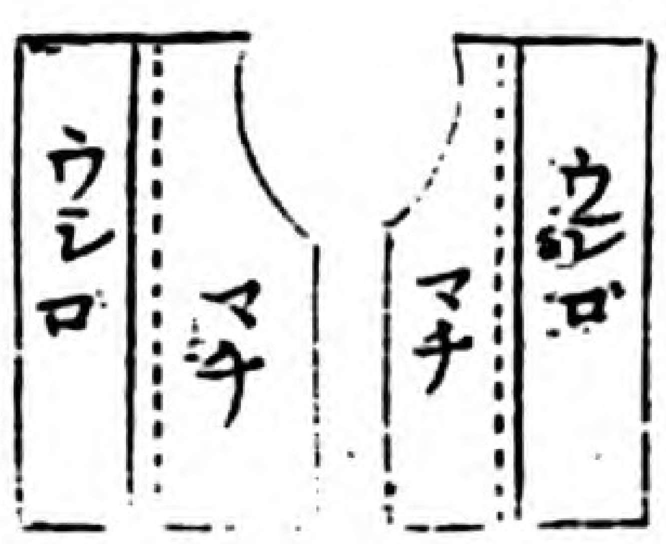
而して襠高袴の裁方及縫合は如何、則ち圖の如く長一丈八尺五寸巾九寸五分の布帛地を以て一枚の袴を得、圖中に記すが如く(い)は前各二尺五寸(ろ)はうしろ各二尺五寸五分(は)は前各二尺四寸(に)はうしろ襠(ほ)は紐(へ)はうらでし(と)は腰板(ち)はつけびしと知るべし、斯くして裁ち去り得たるものは左圖の如くなる則ち前紐、つけびし、腰板、裏腰、後紐を得且

甲

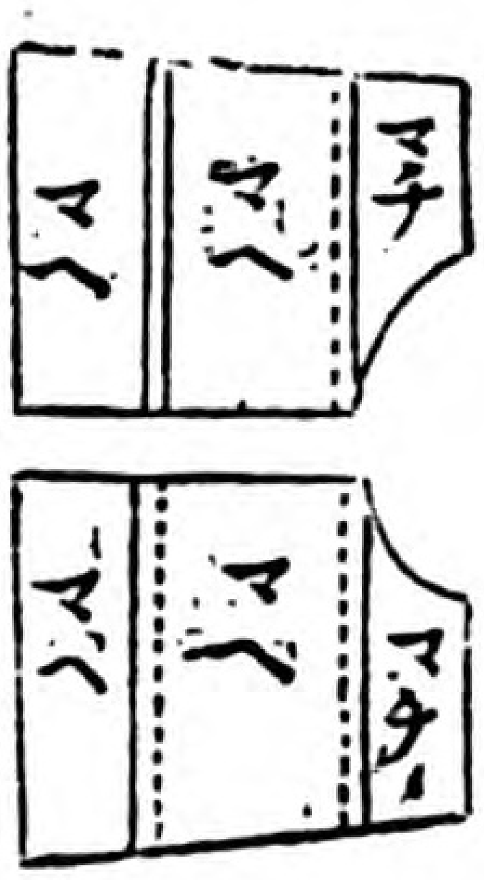


つ一方には乙及丙圖を得、此結果を得たる上は縫合せ

乙



丙



なり、先づ第一に前身を縫ひ合せ、次に後部の脇襠を定め其次に丈けを定め後脇の布帛二枚を重ね脇襠とし、其上を四寸五分と定め折返して縫ふべし、又後部

へ襠をつけて縫ふべし、夫より中の合せ又左右を合せ表より縫ひ裏を返し又縫ふべし、其次に脇を縫ひ裾を五分にくけるなり 而 後凡そ紐何寸と定め稜を折る、素より裏附(甲斐絹又は緞子)の仕立が好ならば表の裁方に應じ裏を縫ひ合せ行くべし。

稜を折るには後部は一ト稜にて可し大へらをつけて紐



丁

を附し、表部は圖の如く七稜に折る則ち最端各四寸五分宛其次は各一寸八分宛中央に一寸五分宛に稜をつけ糊もて腰板を着け又裏腰は針數廿八針にて附るなり、勿論此針は「ぬき針」と知るべし、斯くして調製し得たる袴は丈二尺五寸襠一尺五寸前紐九尺後紐一尺八寸宛の一着を得るなり。筆の序に小兒用袴則ち小袴の寸法を記さん

これは長一丈二尺巾九寸五分の布帛地にて足りとす、(い)は前身襠(ろ)は前身一尺六寸(は)後ろ一尺七寸(ほ)は腰板(へ)はつけびし、此仕立揚は丈一尺六寸五



分後ろ一尺七寸前紐七尺五寸後紐一尺七寸宛と知るべし、縫方は前法と同じければ畧して言はず。

毛絲の腹掛

毛絲は他の織物よりは暖を取るものなり、昨今の如く寒冷を覺ゆる時候には上「シヤツ」より下「シヤツ」靴襪は無論毛絲製に限らる、而して玆に毛絲の腹掛といふは敢て大人用を意味するにあらず一歳より三歳位の小兒の爲に製造し之を用ゐし



めば暖を取ること殊に著し、今其製法を記せば圖に

依て示さるゝ如く第一に首の所より好の編方を以て一段四尺八分位長三寸位に編み始め三段目より少し宛目を增して第六段に終り第七段よりは三倍の目數と爲し以下は目を增さず第十二段に至りて止む、これを編み終らば第十三段よりは中央の部分を二寸位開けて兩端を筒編に編みて三四段に達し小兒の兩足の大股を容るゝに便ならしむ之より異りたる編方をもて腹掛に縁をつけ且つ首の所の紐と腹の所の紐をつくれば立派に一枚の腹掛を得るなり、これは三歳位の小兒に適當するものなれば一歳若しくば二歳の小兒には丈餘あるべし、然る時は第一段目より第六段目迄を縮めて三段若しくば四段となさば可ならん、但し毛絲の色はいろ〳〵異種の色合を用ゆるが宜し、地を赤、桃、紫、黄四色を都合よく配合し、紐と縁とは萌黄を用ゐなば美しき製作品を製し得らるゝなり。

綿入につきて

綿入の裁縫に就きては既號に掲載したるが調製家の便利を思ひ今少しく記する所あり、男子物にて糸織の如きものを用ゐば表六七圓裏を中花絹の通しにして五六圓なり銘線秩父なれば三四圓瓦斯糸や双子なれば一圓内外より二圓内外、これには羽二重金巾裏地を用ゐて好し假は四五十錢、婦人物に至りては種類種々あれば一々記するも煩はしけれど目下の流行は表を縮緬類にして何かの胴抜にし花色絹を裙廻しにせば人より批難せらるゝことなけん、男女共綿は八錢位の青梅一袋にて澤山、小袖ならば十二三錢の袋真綿を用ゐ、袖口は毛繻子か黒八丈(五日市)を用ゐよ、繻子には近頃織姫繻子なるものありて遙に毛繻子にまさり價格も廉なる傾あり、さて其裁方と縫方は既に記載し置きたれど全躰綿入は袷などと違ひ滅多にすると綿のズリ落つる恐あれば縫合せ終らば前後の縫目の間に「かくしびつけ」といふ針を丁寧に入れて縫ひ置くべし左すれば決

して綿の落下する患なかるべし。

杜文一班

流行の栞

春夢

春衣の準備

婦人の禮服――令閨向には先づフキ模樣の三枚揃にして地色は藍鼠、利久鼠、淡葉鼠の類最流行、次は上着を黑縮緬のフキ模樣にして下着二枚を白の紋鹽精、白羽二重、白壁チヨロの中にて撰むべし、但し前者は一般流行する禮服にして後者は之より高尙なるものと知るべし、さて更に經濟的に調製せば上衣一枚を黑のフキ模樣にして下着二枚を淡鼠のフキ模樣若しくは裾模樣にするも可、而して中着一枚則ち下着二枚の上着は通しに仕立つる時は或塲合にて二枚重にて着するも面白し、最後に記すべきは例の小紋縮緬なり、これは一般に行はるゝものにして近來大に此嗜好を進めたり。令孃向に至りては裾摸樣の三枚重にしゝ、色は肉色淡紅掛、柳葉鼠、藤鼠の類にして無論三枚重なれども、上着一枚を他色にするも亦可なり、次は江戸褄模樣にして近時大に流行の傾向あるも餘り高尙的のものにはあらず、再び言へば意氣なる方にて勿論令孃向のみならず令閨向にも用ゐらるものと知るべし、扨模樣の種類は令閨令孃共に應用せらるべきは、松竹梅、唐草松竹梅、四君子、古代四君子、結び柳、濡れ乙鳥、都鳥、龍田川、寒菊の類なれど、水類は冬には不向なれば成るべく避くるが好し、次に紋は孰れも大なる方流行にして凡鯨尺六分五厘より八分迄の處、個所は三個所七分にして五個所三分の姿なり、扨襦袢の半襟は白羽二重、白の紋鹽精、白博多、白壁チヨロの中にて帶は例の繻珍第一と知るべし、素より禮服なれば腹合帶を用ゆるは甚だ不可なり。

男子の禮服――最も高尙的なるは黑羽二重三ツ紋の上着に鼠羽二重の二枚下着を合せ之に黑五ツ紋羽二重の羽織を着し華美なる縞の練仙臺平を用ゐば洋服にて燕尾服を着すると同樣にして則ち小笠原流の大禮服なり、扨次は淡色微塵縞の市樂の上着に風通織の二枚下着を合せ黑七子三ツ紋の羽織に地味なる仙臺平の袴を着せば洋服の所謂「フロツクコート」に當るものにして一般に行はるゝ禮服と知るべし、扨羽織のみの流行を記せば前記の七子其最たるものにして次は紋羽二重、市樂、羽二重、類なり、而して紋は三ツ紋七分五ツ紋三分の勢、紋の大さは鯨尺八分が通常なるも大なる方に至りては一寸位の處最も行はる、帶は無論博多織の紋織、獻上、淡色無地最流行なり。

調製價格――婦人三枚重三十圓より三十五圓、三十八圓より四十三圓。男子三枚重四十圓より四十五圓。羽織は前記の物品にて裏綴子なつ

け十二圓より十五圓上等に至りて十七圓より二十圓、袴は甲斐裏をつけ十圓より十五圓上等品なれば十三圓位の處を裏なしにて用ゆ、帶は繻珍にて八圓より十五圓、二十圓より三十五圓、博多は二圓十五錢より五圓、七圓より九圓迄に日本橋白木屋に於ては調製す。

禮服用髮具

櫛は昨年と變らず半京形にして山は益々高き方流行即ち山一寸三分厚三分三厘より五厘横三寸一分位の處なり、お初形の大きい方にして大抵横三寸の山一寸三分厚三分より三分五厘、而して蒔繪七分の勢力なり、彫も流行、彫は古代模樣又は菊の透彫盛に行はれ堆朱も行はる。

笄に至りても大きくして且つ長きを好む傾向となりぬ、島田用笄本笄差込附にて長八寸兩花は九寸巾は大概四分三厘に三分五厘位全躰蒔中類の流行は次第〳〵に復古の傾あり。

後挿は殆ど昨年と變りなし矢張玉入の祇園形（俗に蛙股）最流行。

新年の花簪

新年の花簪はさて樣々のもの出でけるよ、可憐なる七八歳より十三四歳迄の少女は髮の飾も歳と共に新ならん。新年に流行の傾向ある花簪は先づこまかき摘み細工にして「ゴム製之に亞ぎ其他のものは顏色










製梅花なし、其中意匠の巧なるものを擧ぐれば、綸子の扇面に白ゴム製梅花と淡桃色の牡丹を添ゑしもの、大小輪の梅花を咲かせ寶船に丹頂を舞はしめたるもの井桁を摘み細工にして中に松竹梅を寄せたるもの、同じく摘み細工にして隠れ笠隠れ簑等の寶を集めしもの細工最精巧、若しくは楠玉にして松竹梅を寄せたるもの、若しくは明年の午年を意味する春駒、則ち白ゴム製の梅花に縮緬細工の駒を添ゑしもの、其他枝垂梅に楠玉の下りしも好し、流行は梅が眼目なりと知るべし。

流行の押繪羽子板

毎年來る十二月十五日深川八幡宮年の市に顯はる、本年押繪流行形は團十郎の北條義時、大江廣元、鳥井進左衛門、春藤次郎左衛門、銀獅子、工藤祐經、辨慶、鈴木源左衛門、日向島の景清、武智光秀、七ツ面、熊谷直實、不動明王、等菊五郎の奴凧、安中草三、溝呂木幸吉、曾我十郎、渡邊源次郎、都筑藤七郎、馬丁幸吉、公曉、髮結新三、高市武右衛門等左團次の近藤重三、恒川半三郎、曾我五郎、富樫左衛門、彌太五郎源七、嘉村宇田右衛門、遠山左衛門、角太夫、股野五郎、永實等九藏の仁木彈正、赤垣源藏、金五郎、瀧口上野、松王丸、鬼ケ嶽、俊寛、髮結藤次、武智光秀、馬加大記、佐々木盛綱と翫助の大磯の虎、源義經、お類、お弓、賴朝等なり、其他大物の二人揃には團十郎の九紋龍と左團次の花和尚、團十郎の景清と實子の人丸、左團次の股野と團十郎の眞田、松助の跡部甲斐守と菊五郎の馬丁幸吉、三人揃には團の春藤と菊の高市と左團の嘉村、團の工藤と菊十郎と左團の五郎、團の辨慶と福の義經が左團の富樫、團の熊谷、左團の姉輪と米藏の阿古屋、九藏の馬加と福の毛野と家橘の小文吾、團の鳥井と菊の助六と福の揚捲、四人揃には菊の十郎と左團の五郎と福の虎、米藏の少將等なるが價格は縮緬類の騰貴したるが爲に昨年より一割も高しといふ。

流行の名刺

文体——先づ活版に於ては是迄清朝、隷書、行書、行はれたれども本年は目切廢れたり、隷書も行書も体裁宜しからず、清朝文字は府下に筆寫鐫造する者少き故に字畫一体せず名刺に並べても文字不同ゆゑ本年は大に此の嗜好を減じたり、之に代りて專ら行はるゝものは明朝なり、明朝文字は字体不風流なるも却つて其所に味ありと知るべし、石版は昨年に變らず、用ゐらるれど他人の筆にては面白からず、全体名刺は自筆が當然なるものなれば惡筆にても自筆し之を石版に取りたるものが好し、銅版は餘り多く行はれず、偶に銅版に取りて石版に刷りたるも用ゐらるゝのみ、橫文は「スクリプト」字体廢れて「グラテスク」之れに代る。

臺紙——流行形は大形にて竪三寸七分橫二寸二分（五十錢より一圓二三十錢）小形にて竪二寸四分橫一寸四分（二十錢より四五十錢）に限らる、紙質は舶來「ケント」を第一とし「アイボレ」を第二とすれども後者は

紙の光澤忌味あり、其次は普通の洋紙（日本製）にして局紙（鳥の子）の流行は減したり、其他楠の錢目、神代杉等を薄く削りて紙臺に貼りたるものあれども振はず、型附のものあれども同樣。全躰より言へば本年名刺の流行は印刷アッサリとして紙面の緣邊に修飾を用ゐず、字躰は活版にて大きくして四號小さくして五號に止る。



日用品物價 （十二月六日）

●白米小賣相場（一圓に付改正下落）○一等白米八升七合○二等白米八升九合○三等白米九升二合○四等白米九升七合○五等白米一斗一合

●雜穀（一圓に付）○本場大麥三斗一升○脇場大麥三斗二升○裸麥二斗一升○佐野割麥一斗七升五合○同次割麥一斗九升○同下割麥二斗○上等竹林麥一斗六升五合○中等竹林麥一斗七升五合○下等竹林麥一斗九升五合○上小麥一斗八升○同脇場小麥二斗○佐野搗粟一斗四升○下總搗粟一斗六升○向地蕎麥二斗九升○山穀蕎麥二斗四升○穀粟二斗八升○穀黍二斗六升○常陸黑胡麻一斗五升○田稗五斗二升○常陸稗五斗五升○室蘭黑豆一斗六升五合○本場豌豆一斗六升五合○脇場豌豆一斗七升○栗橋空豆一斗六升五合○下總空豆一斗七升○讚岐空豆一斗八升五合○庄內黑平大豆一斗七升○本穀大豆一斗八升五合○新南京青大豆一斗八升八合○新南京大豆一斗八升五合○栗橋青大豆一斗七升○脇場青大豆一斗七升五合○五社大豆一斗八升○青柳大豆一斗七升○並大豆一斗八升五合○上海大豆一斗九升五合○新室蘭小豆一斗二升七合○南京小豆一斗四升○秩父大納言一斗○向地大納言一斗一升○南京白小豆一斗三升八合○粕壁色小豆一斗三升二合○中手小豆一斗四升○並小豆一斗四升二合○吟小豆一斗三升五合○目黑白サ一斗一升○目無白サ一斗○向地金時一斗五升○遠廊金時一斗二升五合○室蘭隱元九升○銚子隱元九升三合○更紗隱元一斗四升○鶉隱元豆一斗五升

●醬油（一圓に付）○最上七分二厘ヶ七分八厘○極上八分三厘ヶ九分三厘○上物九分八厘ヶ一樽二分○中一樽四分ヶ一樽五分迄○並品切

●鹽（一圓に付）○赤穗三俵七分○大鹽三俵八分○八家三俵八分○本齋五俵四分 五厘○新齋六俵三分 ○古積上二俵七分五厘 ○同中二俵九分二厘

●蜜柑金柑 紀州蜜柑は去月廿三日初めて神田多町の市場に出でたり本年一番船の箱數は一萬二千九百箱にして品は昨年に比し宜しからず然し價は高く一箱五十錢より四十錢位二番船は明日頃入港すべし兎に角本年は外れにて昨年の三分一位の產出なるべし又た金柑も不出來の方にて相場は一箱六十錢前後

●新海苔 本年は採集の期後れしも申分なき豐作にて品位も宜しく飛切一帖十錢其以下は五六錢位本場の大森よりは來月三四日頃出づべし



自己が施したる恩惠に對して惡人より返禮を受んとするは二重の過失より恩惠を施すへき價値なき惡物に恩惠を施こしたる是れ第一の過失なり、時宜に依りては生命を失ふべき危險を冒す是れ第二の過失なり

一疋の狼あり咽喉に骨立ちて苦痛に堪えざれば其難儀を拯ひ吳るゝ者には恩賞を與へんとの約束を立て廣く江湖に救助を求めけるが鴻の鳥は狼の誓言を信じ自己の長き頸を狼の口中に挿入れ首尾能くこの危險なる療治を仕遂げたれば約束通り恩賞に預らんとを請求しけるが其時狼は鴻の鳥に向ひ狼「この恩知らず奴貴樣は乃公の口中から無難に貴樣の頭を引出しておきながら夫れを有難いとも思はないで報酬を强請るとは何ッのとだ」

野兎と雀

自己の要愼を懈りながら他に向ッて忠告するは阿房なり

一疋の野兎鷲の爪に五躰を劈れ七顛八倒の苦痛をなして悲鳴を上げ居たりしが一羽の雀この有樣を見て野兎を嘲り始めたり雀「オヤ〳〵如何したもんだね野兎さん和郎さんは彼ッなに足の疾いのを自慢して居たッけが、和郎さんの素早い足は何處に着いてるけだね」斯くて雀の談話を續け居れる間に何處よりか思ひ掛けなく一羽の鷹飛來り雀を抓み彼の泣き叫ぶにも遠慮會釋もあらばこそ忽ちの內に雀の息の根を止めたり死に瀕りたる野兎はこれを見て野兎「コレ〳〵雀貴郎ハッイ今しがたまで自分は無事息災と思ひ私の不幸を笑らッたが貴樣も矢張り哀れな最後を遂げるではないか」と言いて生前の慰を得霎時苦痛を忘れけり

狼と狐、猿の裁判を受く

廉耻心なく居常人を欺き世を欺く者はョシヤ其眞實を言ふ時にも人は眞實としてこれを信ぜずエソップは短き寓意談を以てこれを證明す

一疋の狸ありて自己の財物を盜まれたりとて一疋の狐を相手取りけるが狐は左る不都合を働らきし覺へなしと言張りて承知せず其時一疋の猿は彼等の爭論を裁判する役目を擔任け原被兩造の辯論を聽きたる後ち猿判事は左の如き宣告を爲せり猿「狸 余は其方は其方が訴へ出たる財物を盜まれたりと思料せず▼狐其方は辯を巧に身の潔白を言張れども余は其方の盜取を以て罪あるものと認定す」

時事一斑

第五議會開く

十一月廿八日天皇貴族院に幸して、第五回帝國議會の開院式を行へり。

實業教育

教育をして徒らに花を收めしめんとしたる弊を矯めて寧ろ實を收めしめんと欲する文部の新施政は、遂に實業補習學校規程を發令せり、所謂實業補習學校とは、諸般の實業に從事し又は從事せんとする兒童に、小學校教育の補習と同時に、簡易なる方法を以て其の職業に要する智識技能を授くる所の處。是れ實に喜ぶへき事なり。

人生の樂事

三田先生福澤翁人生の樂事を說けり、曰く『爰に一種の研究所を設けて、凡そ五六名乃至十名の學者を撰び之に生涯安心の生計を授けて學事の外に顧慮する所なからしめ、且その學問上に研究する事柄も其方法も本人の想ふがまゝに一任して傍より喙を容れず、其成績の果して能く人を利するか利せざるかを問はざるのみか、寧ろ今の世に云ふ實利益に遠きものを擇んで其理を究め之を究めて之に達せざるも可なり、之が爲めに金を費して全く無益に屬するも可なり、其人の一生

涯に成らざれば半途にして第二世に遺すも可なり、或は其人が病氣の時に休息するは勿論、無病にても氣分の進まざる時は業を中止す可し、勤るも怠るも都て勝手次第にして、俗に云へば學者を飼放し、又飼殺しにすることなり』。

事社會公德の缺如に係れり

紛擾又紛擾せるは、昨今の政治界なり、則ち政治界なりと雖、事社會公德の缺如に係れり。個人の敗行は以て一公黨一政府を誤るに足る、豈猛省せずして可ならんや。



家庭の時代

鷄聲茅店月、人跡板橋霜、歳華漸く老て風物何となく寂び且冴たり。戸外の時代は去て家庭の時代來る。

寄書

品格

成堂學人

紳士といひ、淑女といふ、豈美衣美食するの謂ならんや。人に品格あるを謂ふのみ。

品格は人の天爵なり、品格の高下は人の高下に關す、威有て畏るべきは品格あるが故にあらずや、儀有て象るべきは品格あるが故にあらずや。花にして色なくんば花にあらざるべし。月にして光なくんば月にあらざるべし。

身堂々たる政治家にして車夫馬丁の語を發するものあり、身窈窕たる淑女にして淑女の爲すまじき行を爲すものあり、此くの如きは自ら重ぜざるの太甚しきものにして、好んで其紳士たり淑女たるの資格を抛擲せるのみ。語に云ふ、天物を暴殄する勿れと、況や自ら暴殄すべけんや。

蓋し品格を保つは自ら重んずる所以、自ら重んずるは人の自らに對する務にして、又人に人たるの使命を授けし神に對するの務なり。此務を缺ん乎、人の地位は、獸の地位に下るべし。

獸の地位に下りたる人は劣等の人なり、獸の地位に下りたる國民は劣等の國民なり。

故に多望なる國民には必ず自重の風あるを要す、大國民の資格は意氣雄にして品格の高きにあり、品格豈重んぜざるべけんや。そは品格が人の價値なればなり。

明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行